第Ⅲ章　午王山遺跡の調査経過

第１節 本調査以前

午王山を考古学的な手法によって正式に発掘調査をしたのは、1979（昭和 54）年に行われた和光市午王山遺跡調査会による第１次調査からである。しかし、発掘調査以前から午王山には歴史的な関心が寄せられていた。ここでは発掘調査以前、午王山に向けられていた視点と遺跡として認知される過程を紹介する。

文献資料からみる午王山　奈良時代に確立した天皇を中心とした律令国家体制では、今の埼玉県・東京都周辺は「武蔵国」と呼ばれており、さらにいくつかの「郡」や「里」に分割されていた。『続日本紀』によれば、758（天平宝字２）年８月「帰化新羅僧 32 人、尼２人、男 19 人、女 21 人、移武蔵国閑地、於是始置新羅郡」（宇治谷訳 1992）と記載されている。これは、もともとは新羅という国出身だった僧侶や尼、男性、女性が武蔵国に移され、それをきっかけに「新羅郡」という郡ができたということを意味しており、「新羅郡」は、現在の和光市・朝霞市・志木市・新座市とその周辺であろうと言われている。その後、10 世紀中頃に完成したとされる『和名類聚抄』に各地の国や郡が記載される中で、武蔵国から「新羅郡」は見当たらなくなり、代わりに「新座郡」が姿を見せる。この「新座郡」の読み方に「爾比久良」と当てられており、当時「にいくら」と呼ばれていたことがわかる。午王山が位置している新倉の地名は、この「新座郡」に由来すると考えられる。

午王山に歴史的な視点が向けられた記録でおそらく最古のものと考えられるのは、江戸時代に幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』である。『新編武蔵風土記稿』巻之百三十三・新座郡之五の上新倉村の項には「古蹟　新羅王居跡」と見出しが設けられ、以下のように記載されている。

> 古蹟
>
> 新羅王居跡　牛房山ノ上ニワズカノ平地アリ、昔シ新羅ノ王子京ヨリ下向ノ頃、コヽニ居住セシト云、和名鈔ニ載スル当郡ノ郷名志木ト云ヘルハ此辺ノ事ニテ志楽木ノ中略ナルベシト、此村ニスメル好事ノ者イヘリ、当村ニ山田、上原、大熊ナド氏トセル農民アリ、是ハ旧キ家ナルヨシ、彼等ガ祖先ハ京都ヨリ新羅王ニ従ヒ来リシナリト云伝フ、サレバ此山ノ名モ元此王子居跡ヨリ起リタル事ナレバ、御房山ナドカクベキヲ、イツノ頃ヨリカ牛房ノ字にカヘシナラント、是モ村老ノ説ナリ、続紀持統紀元年四月甲午朔癸卯、筑紫太宰、献投化新羅僧尼、及百姓男女二十三人、居于武蔵国、賦田受稟使安生業ト云ヒ、又同ジ紀ニ、韓奈末許満等十二人ヲ、コノ国ニヲカレシコトアレバ、コノ居蹟ト云ハモシクハコレラノ人ヲリシニヤ、サレド外ニ拠モナケレバ、詳ナルヲシラズ（間宮・白井解説 2000）。

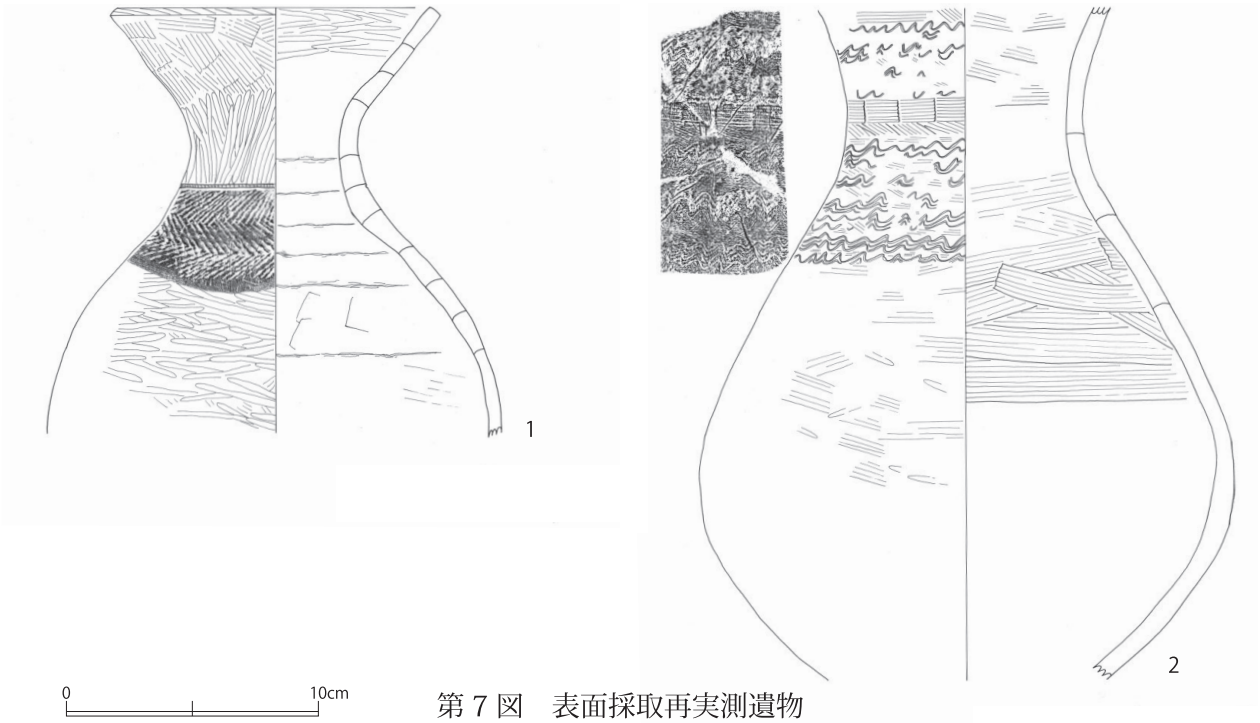
ここでは、午王山を「牛房山」と記し、かつては「御房山」と書くべきだったものがいつの頃か「牛房」の字が当てられたと伝えている。漢字の表記は異なるが、この「牛房山」は「午王山」のことであり、「ゴボウヤマ」という音で呼ばれていたことはこの時点で明らかであるが、いつから「午王山」の字を当てているのか定かではない。また、これまでの発掘調

査では、『新編武蔵風土記稿』に記載されている新羅王居跡の伝承を裏付けるような遺構や遺物はまだ確認されていない。しかし、民俗学者柳田國男が牛房山の新羅王居跡の伝承について注目されていた（柳田 1920）。午王山が特別の山であると認識されていたことは確かである。

遺跡としての午王山　午王山が遺跡として位置づけられるより以前、午王山遺跡周辺地域に住む人々によって、壺形土器（第７図１）と珠文鏡が採取されていた。壺形土器は、埼玉県和光市新倉午王山遺跡（第１次）の報告書内で午王山周辺の地権者宅で検出したことがわかっているが、出土した明確な年月や位置はわかっていない。なお、本遺物は埼玉県立「歴史と民俗の博物館」より返却された遺物が入っているコンテナの中に保管されているが、なぜ博物館で保管されていたのか定かではない。また、地権者が所有する珠文鏡は、1979（昭和 54）年和光市午王山遺跡調査会による午王山遺跡第１次調査を担当した鈴木敏弘が調査地周辺の地権者らに挨拶へ訪れた際、はじめて認識した。この珠文鏡は現所有者の祖父が午王山の畑で土器片とともに珠文鏡を掘り出し、父の代では鉄瓶の蓋と思われ納屋の片隅にしまわれたと聞き取り調査でわかっている。なお、珠文鏡は蛍光 X 線分析による測定と詳細な観察を行い、古墳時代半ばのものと推定されている（鈴木・大屋 2013）。

午王山の遺物について考古学的に注目し、公に発表したのは谷井 彪である。谷井は、『埼玉考古』第４号・第６号で午王山で表面採取した遺物を紹介している（第７図２、第８図）。1966（昭和 41）年１月に刊行された『埼玉考古』第４号「大和町新倉牛王山出土の弥生式土器」では、櫛描簾状文壺（第７図２）が紹介されている。この土器は、台風の際、午王山遺跡の北斜面が崩れた時に出土したものと言われており、弥生時代の櫛描簾状文の壺形土器で半分が欠損し、底部・口縁部も欠損している。しかし、この遺物を採取した明確な年月や出土位置、伴出した土器の記載がなく詳細は明らかではない。また、1968（昭和 43）年２月に刊行された『埼玉考古』第６号の中の「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」では、壺形土器７点、甕形土器３点、長甕形土器１点、土器拓本４点の計 15 点（第８図）が紹介されている。１～８、12 ～ 15 は弥生時代の遺物、10 ～ 11 は古墳時代の遺物とみられる。これらは農家が行った畑の天地返しの際に出土したものと記録されているが、表面採取した明確な年月や出土位置は、先の櫛描簾状文の壺同様わかっていない。また、遺物の所在も不明である。

以上のように、午王山は遺跡として発掘調査を行う以前から遺物が確認される場であった。遺跡としての位置づけが明確にされるのは文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地として位置づけられてからである。埼玉県は、遺跡台帳の整備に努めるため、県内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査を昭和 46・47 年度に行っている。午王山は 1972（昭和 47）年８月 24 日に調査が行われ、その後、正式に遺跡として埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された。このことより、周知の埋蔵文化財包蔵地で開発行為を行う際には法的手続きが必要となり、その後の発掘調査が行われる前提が整うこととなった。



第７図　表面採取再実測遺物

【引用・参考文献】

宇治谷孟訳 1992『続日本紀（中)』 講談社

鈴木一郎・大屋道則 201「伝午王山遺跡出土の珠文鏡について」『市内遺跡発掘調査報告書 16　埼玉県和光市埋蔵文化財調査報告書第 52 集　』 和光市教育委員会

谷井　彪 1966「大和町新倉牛王山出土の弥生式土器」『埼玉考古』第 4 号　埼玉考古学会

谷井　彪・高山清司 1968 年「大和町の遺跡と出土土器（弥生時代・古墳時代)」『埼玉考古』第 6 号　埼玉考古学会

中岡貴裕 2015「埼玉県和光市新倉午王山の新羅王居跡伝承と発掘調査」『あらかわ)』 第 16 号　あらかわ考古談話会

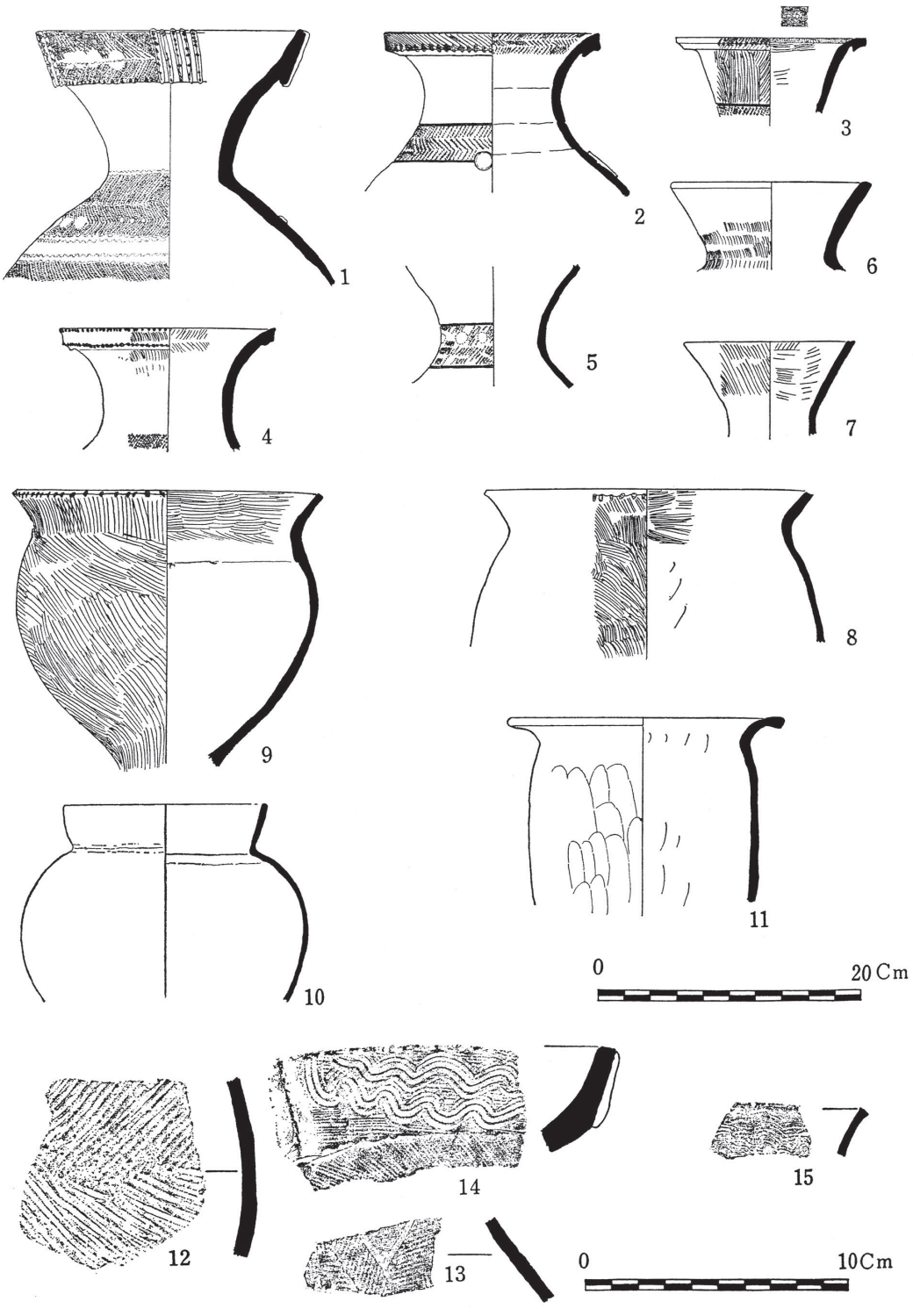
間宮士信・白井哲哉解説等編 2000『新編武蔵国風土記稿新座郡二巻』文献出版

柳田國男 1920「流され王」『史林』5 巻 3 号

和光市 1987『和光市史』通史編上巻　和光市

第４表　表面採取再実測遺物観察表

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。口唇部面取り後、横位ハケ目、頸部横・斜位ハケ目後横位ヘラミガキ、肩部横位ハケ目沈線区画されたハケ刺突文を３段、胴部斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ。口径 12.8cm	A・B・D	良	橙色 7.5YR6/6	埼玉県立博物館より返却されたコンテナ 注記：5・表 山田ｶﾞｹ下 埼玉県和光市新倉午王山遺跡（1981）p.57 に掲載
2	壺	外面横・斜位ハケ目後、頸部は櫛描波状文・簾状文、肩部は櫛描波状文、胴部は斜位ヘラミガキ。内面横・斜位ハケ目。胴部最大径 21.0cm（推定）	A・D・H	良	橙色 7.5YR6/8	『埼玉考古』第 4 号 p.25、和光市史 p.85 掲載



第８図　表面採取遺物（谷井　彪・高山清司 1968 より引用）

第９図　午王山遺跡全体図

第２節　第１次・第２次調査

（１）第１次調査（第 10 図）

調査の経緯　1979（昭和 54）年３月に遺跡の東南支丘が、民間業者の宅地計画で開発されることになり、和光市午王山遺跡調査会が、谷井　彪・鈴木敏弘の調査担当で、６月までの 79 日間で発掘を実施した。調査は支丘上部の平坦面から斜面にかけて弥生時代の方形周溝墓３基、平安時代の土坑・住居跡、古代から中世前後の時期・性格不明の地下道、斜面下部で中世の火葬墓と板碑群、上限不明から近世以降の「室」６基を発掘した[(1)]。

以上の主要な各時代の遺構と遺物を以下で概述する。

方形周溝墓の発掘　調査区の最も北西側で推定環壕に近い第１号墓と、支丘の主軸を中心として斜面上の第２号墓から、斜面途中の第３号墓の配置である。第１号墓は南・北・東溝が残るが耕作の攪乱を受け溝底の一部の残存である。第２号墓は北・西溝だけ確認でき東・南溝は斜面のため消失しており、第３号墓は斜面上部の北溝と短い東・西溝の「コ」の字状である。３基の築造時期は、出土した土器から弥生時代後期と考えられる。

地下道の発掘　発掘で予想できない事態に直面することがあり、調査区の南半分の平坦面の標高 23 ～ 19 ｍの範囲で、地下道が検出された。地下道の出入り口は６か所を発掘したが、規則的な配置ではなく、第２号方形周溝墓西隅周辺で縦坑状の入口が集中的に検出されている。地下道の断面は、不整形な二等辺三角形が基本で、底辺幅が 80㎝前後、高さが約１ｍで、成人男性が中腰での移動が可能であろう。地下道内部では、焼土と炭化材が残っていたが、時期決定できる遺物は皆無であった。遺構の特徴からは、宗教的な修行の性格を持つと考えている。

火葬墓と板碑の発掘　火葬墓は、板碑群の西端に接する平坦部に４基と、西北６ｍの斜面上段に１基がやや離れて検出された。各規模は長径は１～ 1.5 ｍ前後、短径が 0.5 ～ 0.7 ｍで１～３号墓は楕円形、第４号墓は長方形で、いずれも焼土と炭化物が含まれている。第３・４号墓には炭化材が残り火葬の痕跡が顕著であるが、人骨の残存が明確ではなく、改葬した可能性もある。

板碑群は、標高 17 ｍの斜面を背に 13 ｍの範囲で東・西群に集中し、板碑の各年号で樹立の推移を復元できる。東群は西から東への傾向と新しく西群へ続き、最古の応永８年（1375）から明応５年（1496）までの 120 年間で、移動したものも含め 45 点で、全体の推移を知ることができる貴重な資料である。現在、和光市指定文化財に選ばれている。

第１次調査のまとめ　弥生時代の成果は、発掘した方形周溝墓３基が台地中央を囲む環濠集落の東溝外側で、墓域形成を確認したことである。古代から中世と推定した地下道の実態が把握できたことで、板碑群と火葬墓に先行する宗教的修業の遺構と想定した。板碑群の応永から明応年間と火葬墓の併存は、隣接する金泉寺の創建時以降と重なり、寺史の史料と考古資料の分析で、中世地方史の復元に貢献できよう。

（２）第２次調査（第 11 図）

調査の経緯　1981（昭和 56）年７月に市道計画の事前調査担当の依頼が筆者にあり、その説明を受け、和光市史の関係で榎堂遺跡の発掘に参加した埼玉大学・國學院大學生と、新たに明治大学生に地元市民の調査体制で８～ 11 月に第２次調査を実施した。発掘対象は、市

道計画の幅６ｍ、長さ 200 ｍと一部拡張部を含め全体が約 1500 ㎡である[2]。

環濠の調査　発掘は東側から表土の掘削をはじめ、ほぼ東西方向の第１号溝（東環濠）[3]を最初に確認し、西側第２号溝（内環濠）まで 145 ｍ、その西側７ｍの第６号溝は上部に第 30 号住居跡が構築され、さらに西側 60 ｍで第５号溝（西環濠）が掘削されている。

東端の第１号溝から西端の第５号溝まで内側で 220 ｍで、西側の第２・６号溝は集落を４：１に分ける機能があり、各溝の上限と下限の消長が問題である。集落の終焉時にその機能が衰退し、土器等の投棄が第１号溝上層で弥生時代後期の多くの土器が発掘された。第２号溝は、下層から中層まで自然堆積で上層は埋め戻され、第６号溝と第３・４号溝が上部や併行して掘られ、時期が不確定だが東・西居住区の区画の機能を果たしている。

住居跡の調査　住居跡の発掘は、調査区内の 49 軒を検出し、47 軒の発掘を実施し第２号溝の東の 33 軒と西の 14 軒に分かれた。東居住区で大型の第１・３・20 号住居跡は、東西に並び、時期的にも推移する。第３号住居跡（第 51 図）は、四壁が直線的で四隅が丸い小判形で、長径 9.75m、短径 8.4m 前後で面積は約 80 ㎡の最大規模である。その位置は東の第１号溝から 90 ｍ、内側の２号溝まで約 50m、西の第５号溝まで 120m で、集落の南・北から 40 ｍの中央で、特別の存在であることは明白である。炉跡は調査範囲内だけで４か所あり、通常の炉に相当する位置に、径約 60cm の不整円形の火皿式炉であり、住居跡の中央には、長さ 1.5m、幅 50cm の長楕円形の地床炉がある。東壁中央には凸堤を持つ貯蔵穴があり、小砂利を含む砂礫が散乱する。遺物は復元可能な壷形土器１点と壷と甕の破片が出土した（第 27 図）。

大型の第 20 号住居跡（第 68 図）は、第３号住居跡の東側で復元長径 8.4m、短径 6.95m で火皿式炉である。東側の大型第１号住居跡（第 49 図）は、第１号溝から 25 ｍで、約２／３を発掘し長径 8.9m、短径 6.4m で、炉跡は西側主柱穴の中間で地床炉である。柱穴は、長方形に掘られた北側２本が主柱穴である。出土した櫛目文の壺形土器は、中期と報告し、上記の大型住居では最古としたが、それ自体の位置づけは再検討すべきか[4]。

中・小型住居跡は、平面形態・炉・貯蔵穴の種類と時期は報告書に整理し、弥生土器の編年は明確に中期末を示さず、古式土師器の不在を指摘し、主に後期の変遷を示した。

第２次調査のまとめ　環濠の発掘では、東・西 220m の規模と、二重内環濠で東・西居住区の２分を確認した。集落構成では、大型住居３棟と中・小住居跡 40 棟の特徴と、北関東系・東海系土器の出土で、遠隔地との交流を確認した。

【註】

１）第１次調査は、『にいくらごぼうやま　和光市新倉午王山遺跡発掘調査概報』1979 年　和光市午王山遺跡調査会、『埼玉県和光市新倉午王山遺跡』1981 年　和光市午王山遺跡調査会による。

２）第２次調査は、『にいくらごぼうやま-午王山遺跡第２次発掘調査概要-』1982 年　和光市教育委員会、『埼玉県和光市午王山遺跡』1993 年　和光市教育委員会による。

３）第２次調査時点での遺構番号とした。後述では、１号溝＝Ａ溝、２号溝＝Ａ溝、６号溝＝Ｂ溝、５号溝＝Ｃ溝と振り替えを行った。

４）本総括報告書第Ⅳ章では後期前半としている。

第３節　第３次～第７次調査

（１）第３次調査（第 12 図）

第３次調査は、1993（平成５）年３月１日から同年３月 26 日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉３丁目 2861- １で、遺跡の南向きの緩斜面の畑であり、南側の土留め工事及び個人農地改良に伴う発掘調査である。実質の調査面積は約 272 ㎡である。

検出された遺構は、Ａ溝・Ｂ溝の２条の溝のほか古墳時代の住居跡１軒が検出された。Ａ溝（内環濠）は、遺跡の平坦部と緩斜面を区分けするように、調査区北側を東西方向に検出された。最大幅は 2.24 ｍ、深さ 1.12 ｍを測る。出土遺物は、中層から菊川系の擬似縄文を持つ弥生時代後期の壺のほか銅鐸形土製品１点などが出土した。Ｂ溝（外環濠）は、調査区の南側で、Ａ溝より標高が 1.6 ｍ下がった緩斜面上に、Ａ溝と同じく東西方向に検出された。最大幅は 1.44 ｍ、深さ 0.88 ｍを測る。出土遺物は少なく、頸部に文様帯を持つ広口壺破片が出土し、Ａ溝の破片と接合し（第 198 図 10）、復元実測の個体となった。

（２）第４次調査（第 14 図）

第４次調査は、1993（平成５）年８月 30 日から同年９月 22 日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉３丁目 2844- １で、遺跡の南西側の平坦面の畑であり、個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積は約 510 ㎡である。

遺構は、Ａ溝（内環濠）・Ｂ溝（外環濠）の２条の溝のほか、弥生時代とみられる住居跡が７軒検出された。Ａ溝は、調査区中央から東端へカーブして検出され、東側の調査区外では、過去の土取工事によりローム層が大きく削り取られ消滅している。最大幅は 3.2 ｍ、深さ 1.4 ｍを測る。Ｂ溝は、Ａ溝の外側を同じくカーブを描くように検出されている。北端は攪乱で消滅し、南端は土取り工事によって崖となり消滅している。最大幅は 1.8 ｍ、深さ 0.9 ｍを測る。この調査区では、Ａ溝の上に重複した住居跡が２軒（第 50 号住居跡・第 51 号住居跡）検出されており、Ａ溝が埋まった時期の推察資料となっている。

Ａ溝の中層からは、壺の肩部に段を持つ東海地方の菊川式の特徴がある大型壺（第 199 図 29）、銅釧１点が出土している。

（３）第５次（Ａ区・Ｂ区）調査（第 13・14 図）

第５次調査は、1994（平成６）年６月 30 日から同年９月２日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、畑地２枚分であり、東側の新倉３丁目 2836- １をＡ地区とし、西側で第４次調査北側の新倉３丁目 2842- １、2843- １をＢ地区とした。ともに個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積はＡ地区は約 800 ㎡で、Ｂ地区は約 594 ㎡である。調査区が隔たって位置しているため、道路（市道 283 号線）の直線を軸とし一辺 100 ｍ四方の大グリッド（区画）を任意に設定した。大グリッド内には一辺４ｍの小グリッドを設け、東から西へＡ～Ｙ、南から北へ１～ 25 と表示し調査を進めた。

Ａ地区では、第２次調査で検出されたＡ溝東側の延長部分が検出され、弥生時代とみられる柱穴と炉跡のみの住居跡が２軒検出された。他には古墳時代と平安時代の住居跡などが検出された。

Ｂ地区では、第２次・４次調査で検出されたＡ溝西側とＢ溝のそれぞれの延長部分が検出

された。Ｂ溝上部は、弥生時代後期の第 30 号住居跡、第 62 号住居跡、第 63 号住居跡に壊されていた。弥生時代の住居跡は、既調査と接合した遺構を含め計 13 軒が検出された。出土遺物は、Ａ溝からは弥生時代後期で東海地方の菊川式の特徴である擬似縄文が施された壺のほか、Ｂ地区Ａ溝では、銅鐸形土製品１点、土鈴１点などが出土した。住居跡からも東海系の壺、甕が出土している。

（４）第６次調査（第 15 図）

第６次調査は、1996（平成８）年２月 13 日から同年８月 30 日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉３丁目 2841- １、2842- ２で、遺跡の平坦部分の畑で、第５次調査区の東側に接する場所で、個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積は約 1,119 ㎡である。調査においては第５次調査のグリッドラインを用い測量等を進めた。

Ａ溝の内側であるため、検出された遺構は、全て住居跡であり、弥生時代中期の住居跡１軒のほか、中部高地系の櫛描簾状文土器が出土する長方形の住居跡３軒、弥生時代後期の住居跡 21 軒、合計 25 軒が検出された。そのほか、旧石器時代の礫群、石器集中が検出されている。出土遺物は、弥生時代中期の甕、後期の櫛描簾状文を持つ岩鼻式の甕、岩鼻式の住居跡からは久ヶ原式の壺、甕が共伴して出土している。そのほかには、東海地方の菊川式の特徴である擬似縄文が施された壺などが住居跡から出土している。

（５）第７次調査（第 15 図）

第７次調査は、1998（平成 10）年３月 17 日から同年３月 25 日まで和光市遺跡調査会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉３丁目 2847- １、2861- ２であり、遺跡の南向きの平坦部から緩斜面に地形が変化する地点であり、第３次調査区、第４次調査区、第６次調査区に囲まれた場所である。共同住宅建設に伴う発掘調査であるが、大部分が過去の土取り工事により大きく削られており、調査面積は約 105.6 ㎡である。調査においては第５次調査のグリッドラインを用い測量等を進めた。

検出された遺構は、一部が土取り工事により壊されているが、Ａ溝１条が検出された。Ａ溝は、東側は直線的であるが、西側の第４次調査区に向かうに従い緩やかにカーブしている。主な出土遺物は、弥生時代後期の東海系擬似縄文の土器多数のほか、銅鐸形土製品１点などがＡ溝中層より出土している。

第４節　第８次～第 14 次調査

（１）第８次調査（第 16 図）

農地改良に伴い、2000（平成 12）年４月３日から同年７月 18 日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2839- １で、遺跡のほぼ中央南東寄りにあたり、北側に第２次調査区、南西側に第３次調査区が隣接する。調査面積は約 787 ㎡である。発掘調査は、重機による表土除去後、人力により遺構確認・精査を行い、測量については第５次調査のグリッドラインを用いて調査を進めた。その結果、第２次調査との重複を含め弥生時代の住居跡 24 軒のほか、旧石器時代の石器集中ブロック、古墳時代後期の住居跡等が検出された。遺物は遺構同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

（２）第９次（Ａ区・Ｂ区）調査（第 16･17 図）

農地改良に伴い、2001（平成 13）年２月 13 日から６月 29 日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査区は、第２次調査区を挟んで南北２地点で設定され、和光市新倉３丁目 2832−１に所在する北側の畑地をＡ区、同市新倉３丁目 2840-1 に所在する南側の畑地をＢ区とした。調査面積はＡ区が約 368 ㎡、Ｂ区が約 479 ㎡である。発掘調査は、両地区とも重機による表土掘削後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、第２・８次調査との重複を含めＡ区で弥生時代の住居跡９軒のほか、近世土坑等、Ｂ区で弥生時代の住居跡 16 軒のほか、旧石器時代の石器集中ブロック、奈良・平安時代の住居跡等が検出された。遺物は従前の調査同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

（３）第 10 次調査（第 18 図）

宅地造成工事に伴い、2004（平成 16）年 11 月１日から同年 11 月 26 日に和光市遺跡調査会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2837− １で、遺跡の最も南東側台地平坦部にあたり、南側に第１次調査区、北側に第２次調査区が隣接する。発掘調査は道路予定地及び宅地造成で削平されるおそれがある範囲で行い、調査面積は約 567 ㎡である。

検出された遺構は、弥生時代のＡ溝（内環濠）・Ｂ溝（外環濠）のほか、Ｂ溝（外環濠）外側から住居跡１軒、方形周溝墓２基 (1) 等が検出された。Ａ溝は内環濠の一部で、上面最大幅約 2.3 ｍ、確認面からの最大深度約 1.1 ｍを測る。遺物は少なく覆土中から弥生時代後期とみられる甕形土器・壺形土器等が少量出土した。Ｂ溝は延伸方向から外環濠の一部と推定されＡ溝から南側約 14 ｍに位置する。検出した範囲では長さ 6.1 ｍ、上面最大幅約 1.8 ｍ、確認面からの最大深度約 95 ㎝を測る。遺物はＡ溝同様、弥生時代後期とみられる壺形土器、甕形土器等が極少量出土した。方形周溝墓２基は、Ｂ溝（外環濠）外側、台地肩部寄りの平坦地に近接して分布する。２基とも遺存状態が悪く平面形態等は定かでないが、第１次調査の調査成果および周辺に分布する遺構の時期から弥生時代と推定した。

（４）第 11 次調査（第 18 図）

農地改良に伴い、2004（平成 16）年 11 月 16 日から同年 12 月 24 日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2838− １の一部で、台地東側縁辺から約 20 ｍ西側に奥まった台地上に位置し、東側に第 10 次調査区が隣接する。調査面積は約 178 ㎡である。発掘調査は、重機による表土掘削後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、弥生時代の住居跡１軒、溝１条、奈良時代の住居跡２軒等が検出された。弥生時代の溝は、延伸方向及び断面形状から既調査の第２次・第５次Ａ区・第 10 次調査で検出されたＡ溝（内環濠）と推定される。検出した範囲では上面最大幅 2.4 ｍ、確認面からの最大深度 1.1 ｍを測る。遺物は覆土中から弥生時代後期を主とした壺形土器、甕形土器等が大量に出土した。弥生時代の住居跡は、このＡ溝（内環濠）から内側へ約 10 ｍ離れた位置に構築されている。

（５）第 12 次調査（第 19 図）

農地改良に伴い、2005（平成 17）年１月 28 日から同年５月９日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2834− １で、第２次調査区の北側に隣接す

る南北に伸びる平坦な畑地が調査地で、南側に第２次調査区を挟んで第８次調査区、南西側に第９次調査Ｂ区が位置する。調査範囲は、当初畑地１枚全域を調査対象としたが、遺構・遺物が広範に分布することから調査期間が長期におよぶことが予想されたため、調査区を東西に２分割して西半分を第 12 次調査として実施した。調査面積は約 400 ㎡である。

検出された遺構は、第２次調査との重複を含め弥生時代の住居跡 11 軒、近世以降の土坑等で、遺物は主に弥生時代後期の壺形土器、甕形土器等が住居内を中心に出土した。

また今回の調査では、調査区北側台地縁辺部で環濠確認に伴うトレンチ調査を実施した。午王山遺跡の環濠は、先の調査から南側では集落を囲う二つの環濠（Ａ溝・Ｂ溝）の存在が明らかになっており、それらが北側でも展開して全周するかなどの確認を行うため、北側の台地縁辺部の一段下がった比較的平坦な２地点でトレンチを掘削した。しかしながら、トレンチ範囲においてはＡトレンチで近・現代の根切溝１条が検出されたのみで、環濠は確認されなかった。

（６）第 13 次調査（第 20 図）

遺跡の中央を東西に走る市道の拡幅工事に伴い、2006（平成 18）年８月 16 日から同年８月 24 日に和光市遺跡調査会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2825- ３で、第２次調査区の南側に隣接し、第５次Ｂ区の西約 50 ｍにあたる。発掘調査は道路を拡張する範囲で行い、調査面積は約５㎡である。

検出された遺構は、弥生時代の溝１条のほか、近世以降の溝である。弥生時代の溝は、延伸方向及び断面形状から第２次調査で検出されたＣ溝（条濠）の南側延伸部分と推定される。検出した範囲では上面最大幅約 1.8 ｍ、最大深度約 1.2 ｍを測る。遺物は乏しく、埋没土に混在して二次的に流れ込んだとみられる弥生時代後期の土器片が極少量出土した。

（７）第 14 次調査（第 19 図）

農地改良に伴い、2007（平成 19）年３月５日から同年５月 11 日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉３丁目 2834- １で、平成 17 年に調査が行われた第 12 次調査区の東側未調査部分に当たる。調査面積は約 684 ㎡である。発掘調査は、重機による表土除去後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、第２・12 次調査との重複を含め弥生時代の住居跡 16 軒のほか、平安時代の住居跡、縄文時代の土坑等が検出された。遺物は遺構同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

【註】

１）第５号方形周溝墓は、既報告（鈴木 2014）では個別遺構（第 13・14 号溝状遺構）として報告したが、本報告では２条の溝は１基の方形周溝墓の一部であると判断した。

第５節　保存目的（第 15 次）調査と調査全体の概要

（１）保存目的（第 15 次）調査（第 17 図）

第 15 次調査は、2011（平成 23）年４月 26 日から同年４月 28 日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉３丁目 2831- １であり、遺跡の平坦部であるが、北側

の隣地は急峻な崖地となっている。今回の調査地点の土地は、将来的に史跡として保存・整備する予定として、2010（平成 22）年 11 月 29 日付けで土地売買契約を取り交わし、和光市の市有地とした場所である。調査面積は約 306 ㎡である。

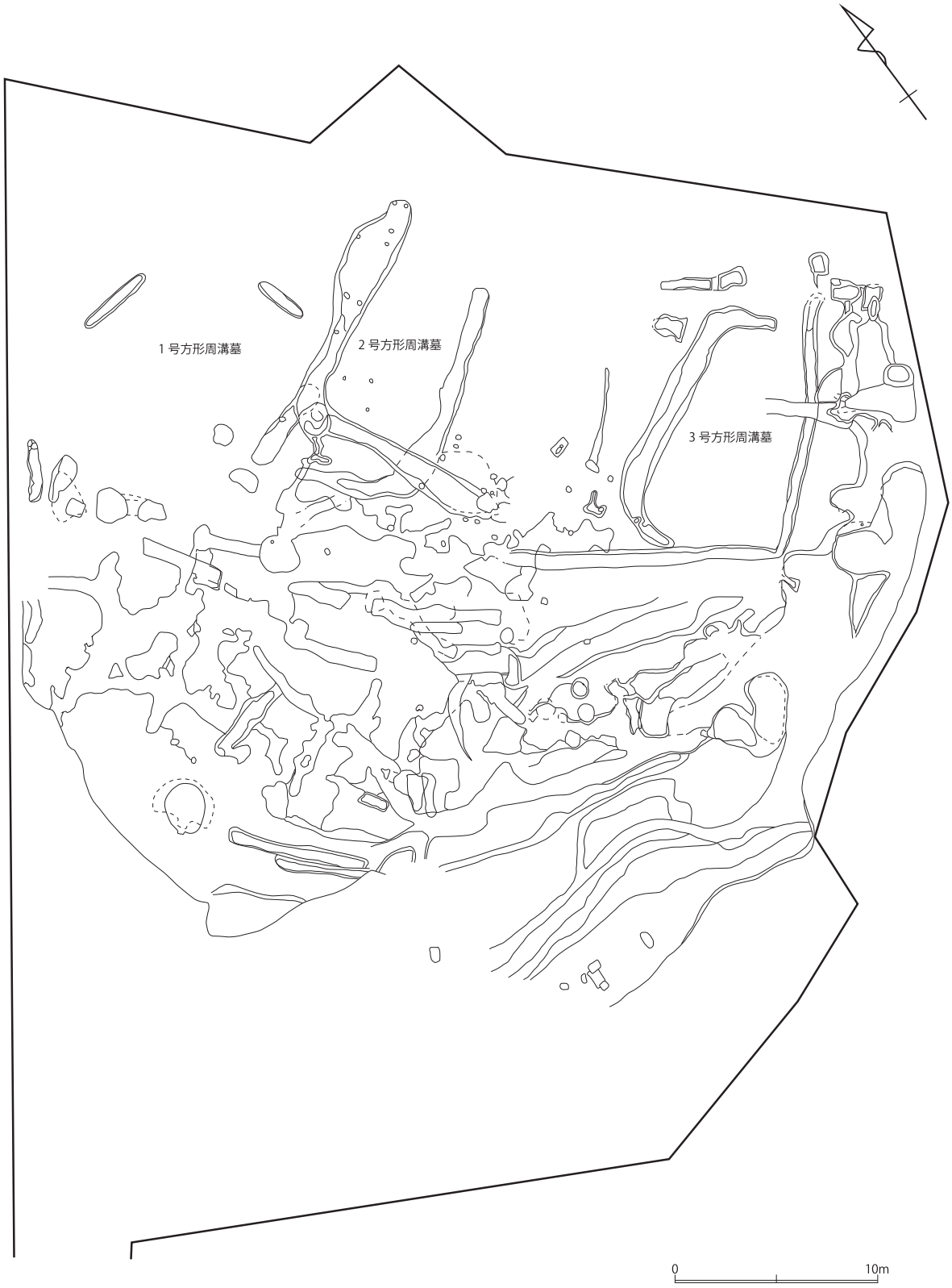
第 15 次調査は、将来的な保存を目的とするため、遺構確認を主目的としたため、ローム層上面での遺構の範囲確認にとどめた調査である。縦長の対象地にあわせ、重機によりトレンチ（試掘坑）を掘削しローム層上面にて遺構の有無確認を行った。遺構が確認された部分では、遺構の全容を把握するため掘削範囲を拡張し、遺構上面の精査をし平面形状を平板測量により記録を行った。遺跡の保存のための調査であるため、遺構の掘り下げは行わなかった。

検出された遺構は、住居跡６軒、土坑２基である。市道 283 号線に面した南側の３軒の住居跡は、第２次調査で検出されている第 13 号住居跡、第 15 号住居跡、第 16 号住居跡と接続する位置で確認されたため、第２次調査の番号を付した。新たに確認された３軒の住居跡は、平面形が楕円形と円形に近い楕円形の平面形状をしている。確認面での覆土の色調、平面形態、周囲の住居跡の検出状況から見て、弥生時代の住居跡と判断し、これまでの調査から継承している通し番号として第 150 号住居跡、第 151 号住居跡、第 152 号住居跡と付した。

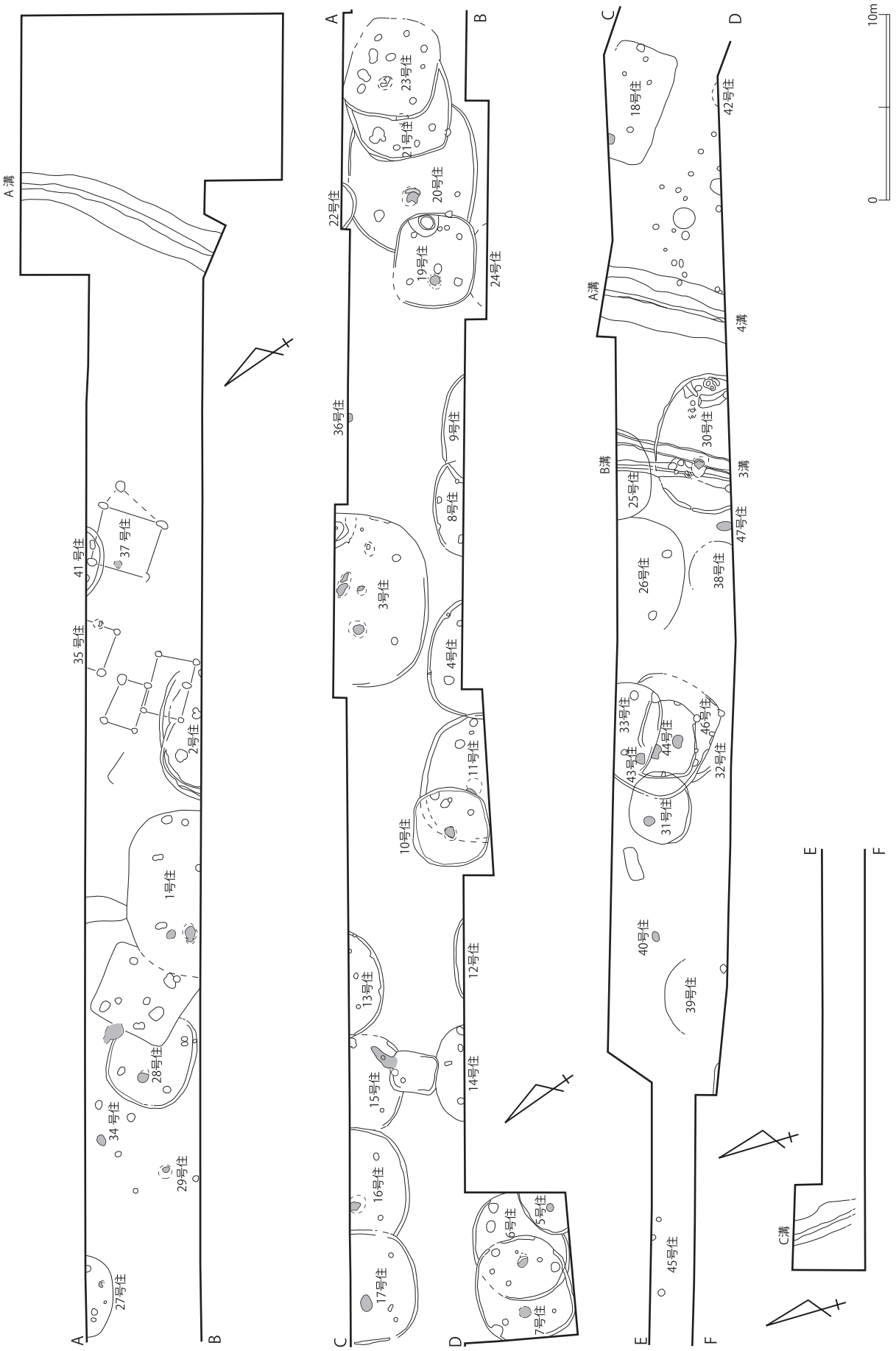
出土遺物は、遺構確認が主目的で遺構掘削を行っていないため検出されていない。

（２）調査全体の概要

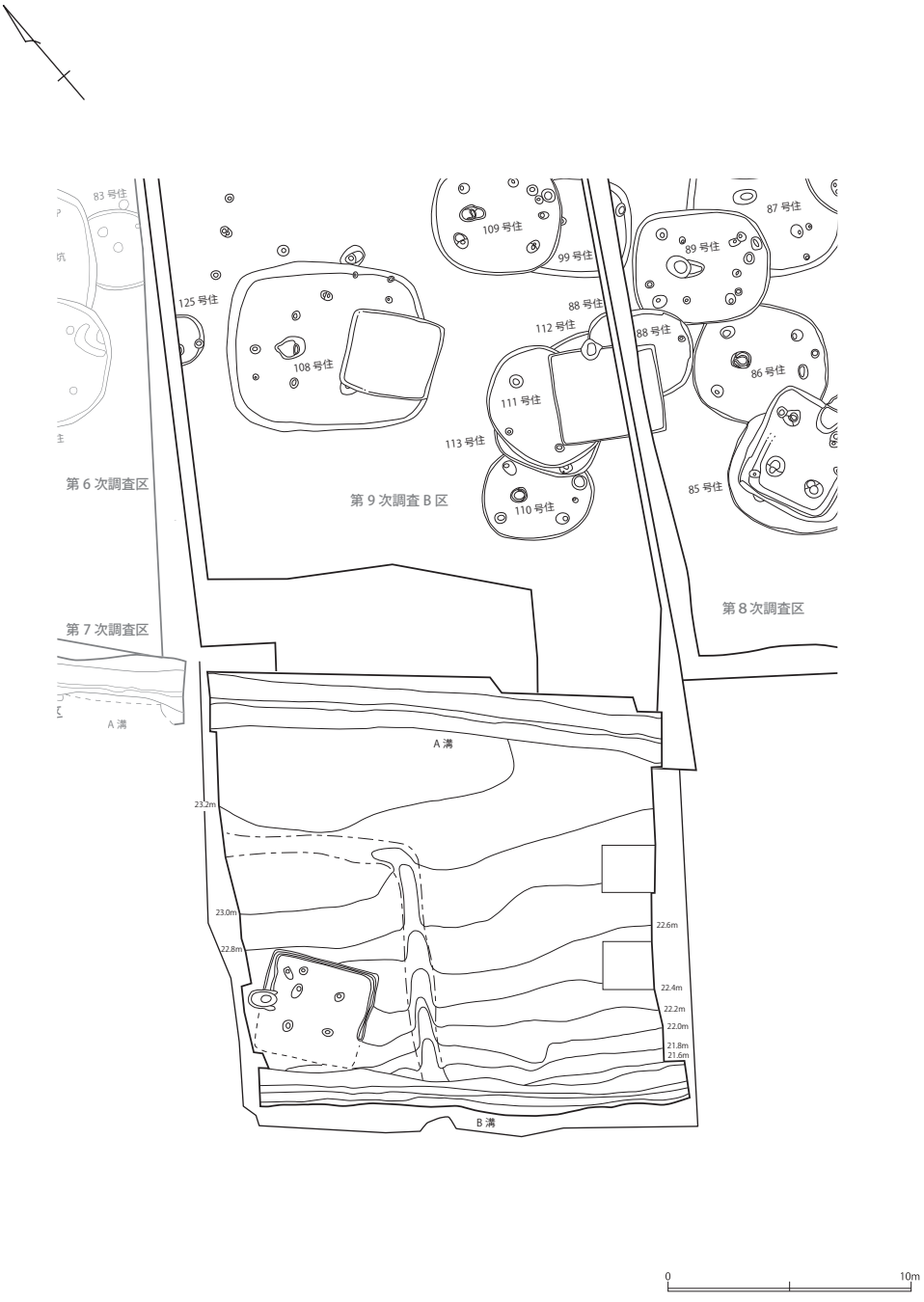
第１次～第 14 次までの発掘調査は、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査が行われている。第 15 次調査は、上記のとおり保存目的の遺構確認だけの調査である。午王山遺跡の埋蔵文化財包蔵地は、午王山頂部の平坦面から緩斜面にかけての部分が、遺構・遺物が存在する遺跡範囲である。その遺跡範囲の全面積は約 19,781 ㎡であり、第１次から第 14 次調査までの総発掘調査面積は約 10,569 ㎡を測り、午王山遺跡範囲の約 53.4％が発掘されている。主に弥生時代の住居跡 149 軒、方形周溝墓５基、Ａ・Ｂ・ＣとしたＶ字状の３条の溝等の遺構と遺物が発掘調査され、遺跡の状況や特徴が判明している。



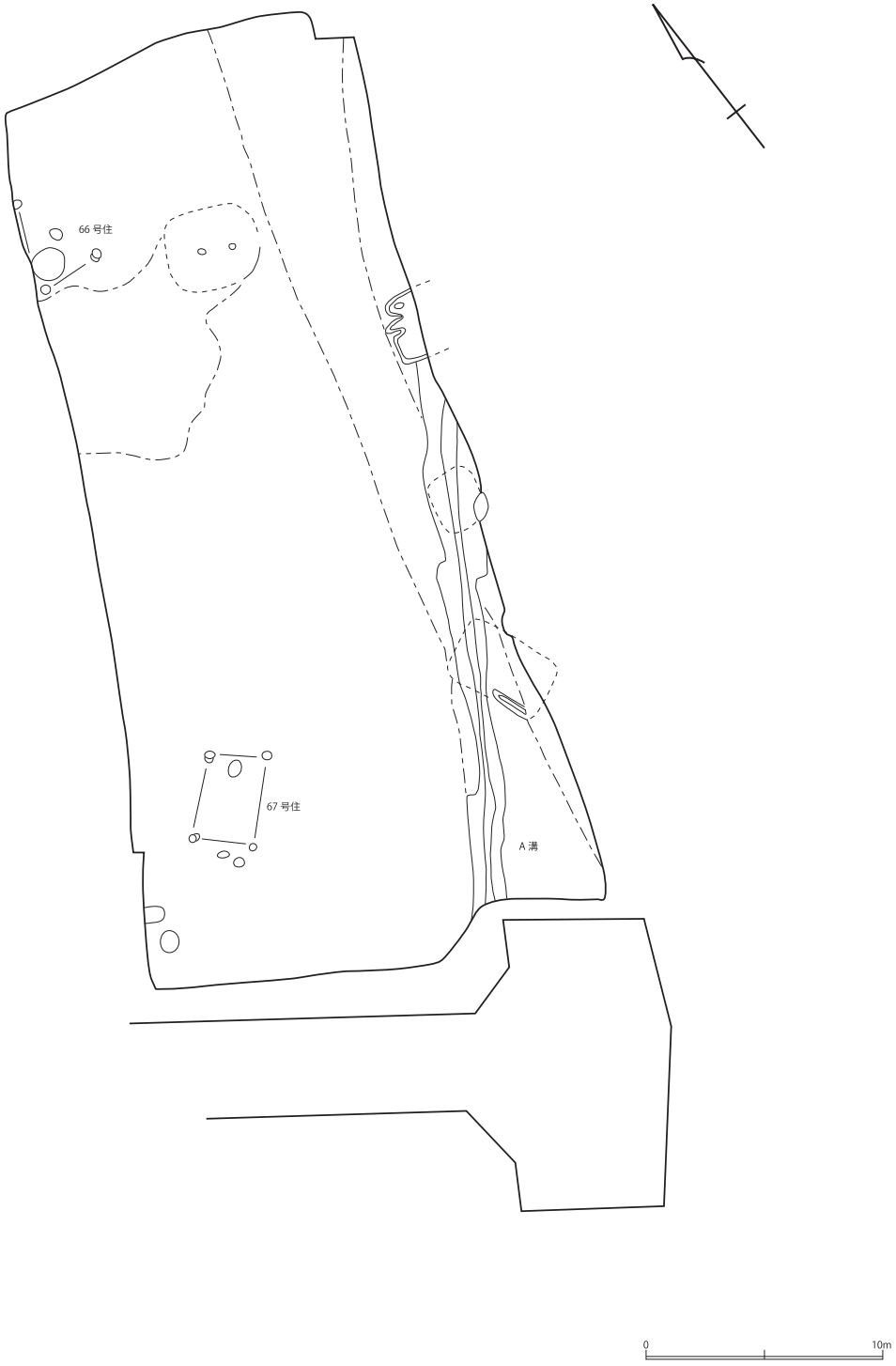
第 10 図　第 1 次調査区全体図



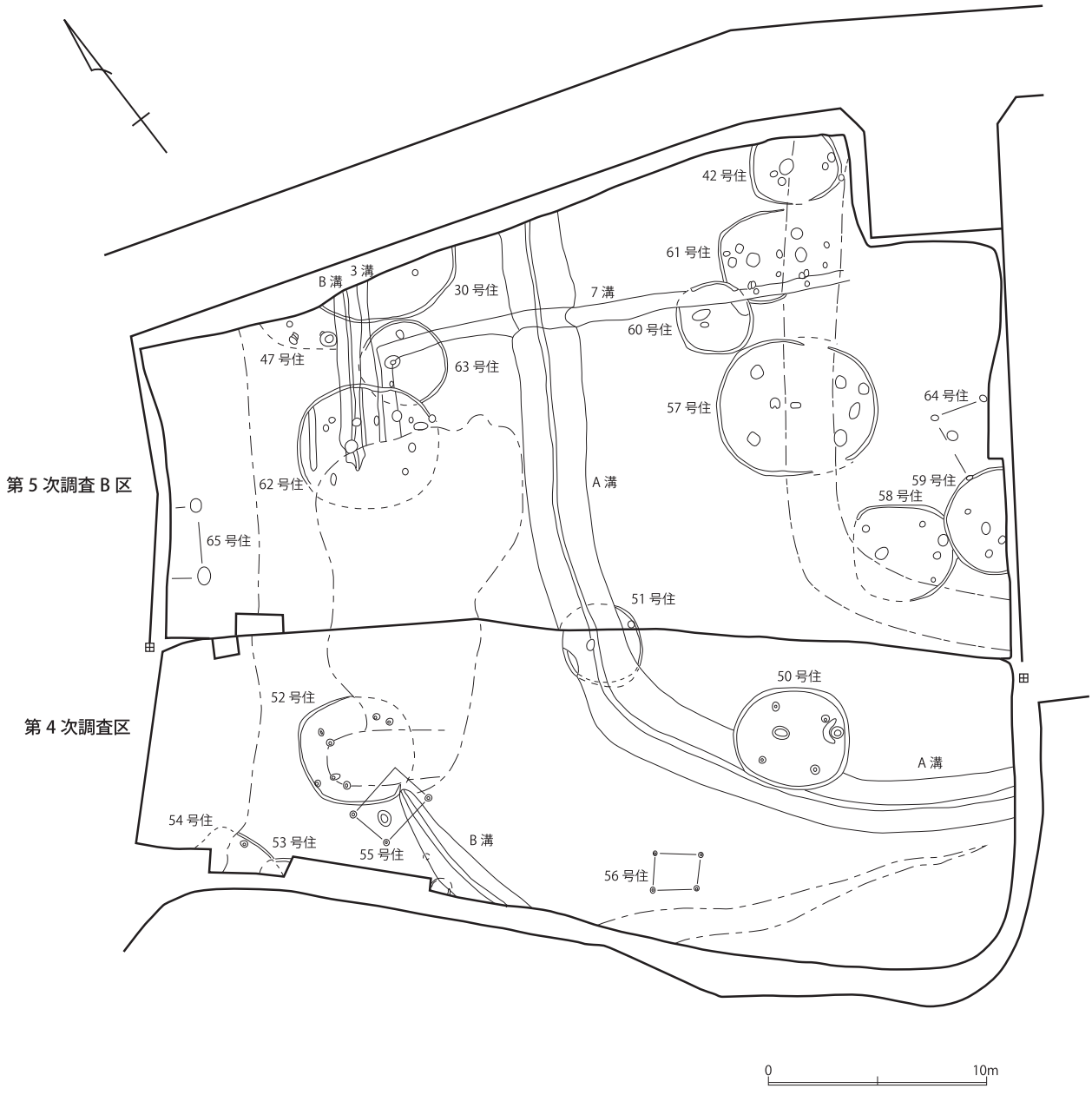
第 11 図　第 2 次調査区全体図



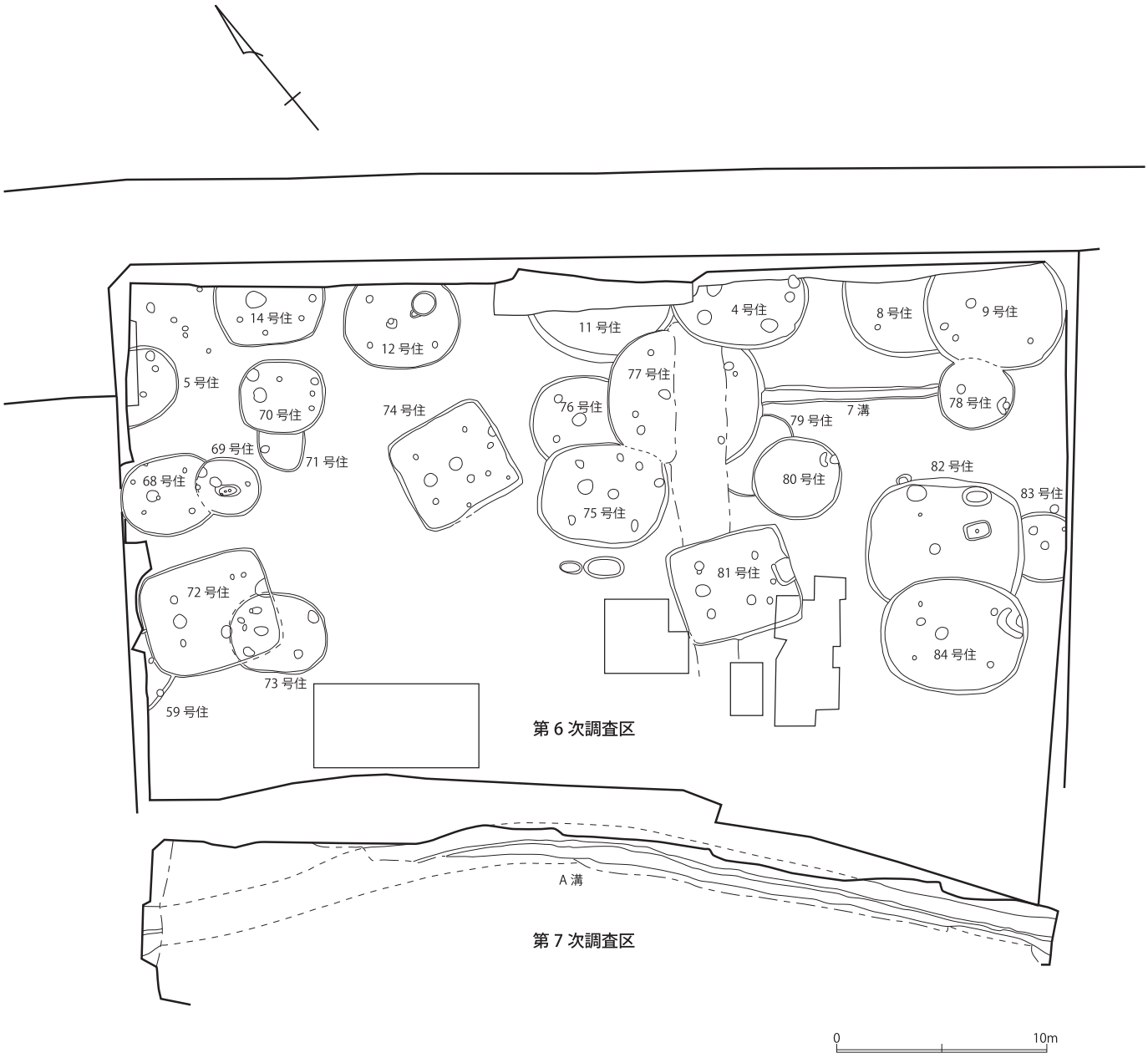
第 12 図　第 3 次調査区全体図



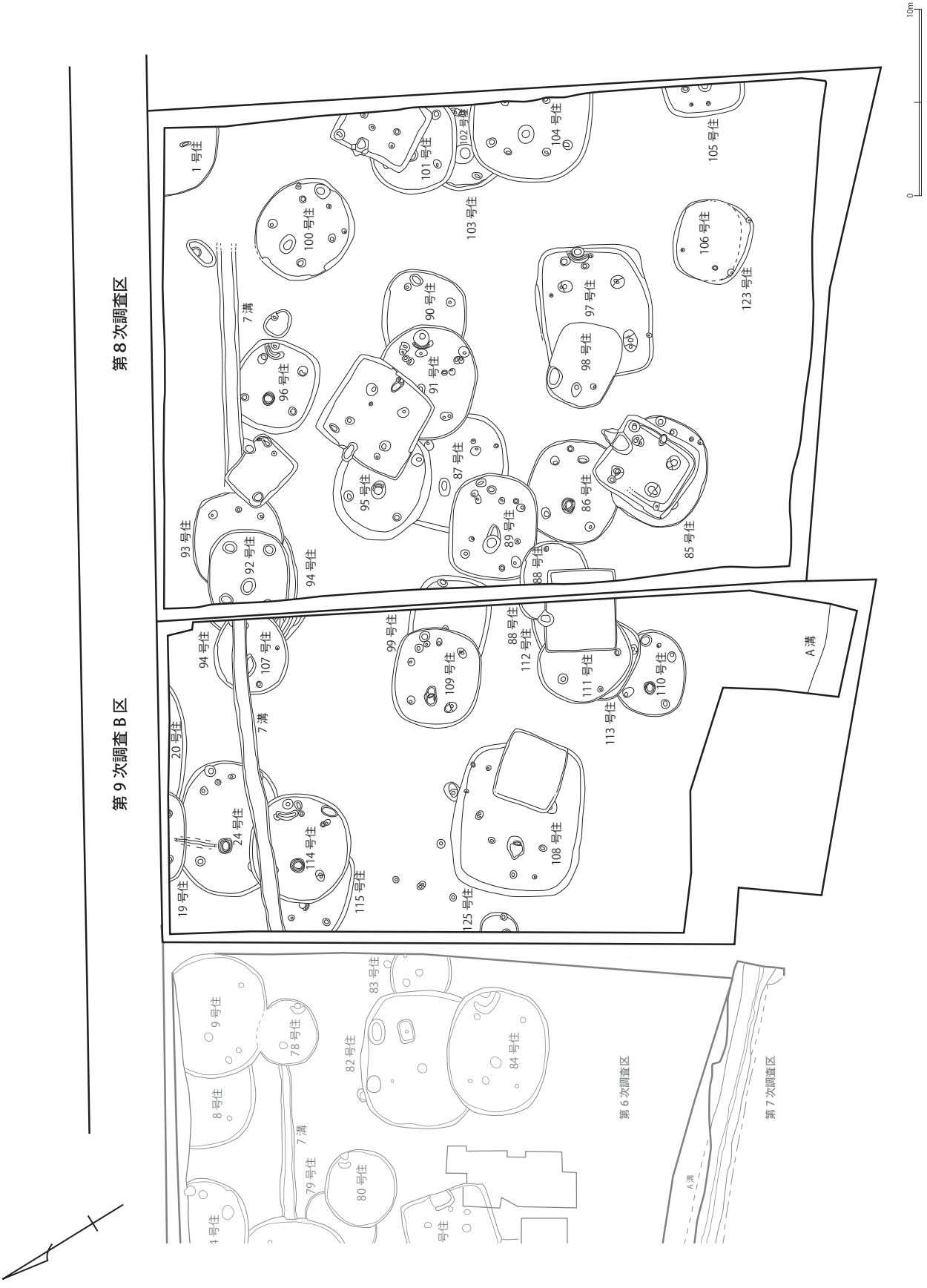
第13図　第5次調査A区全体図



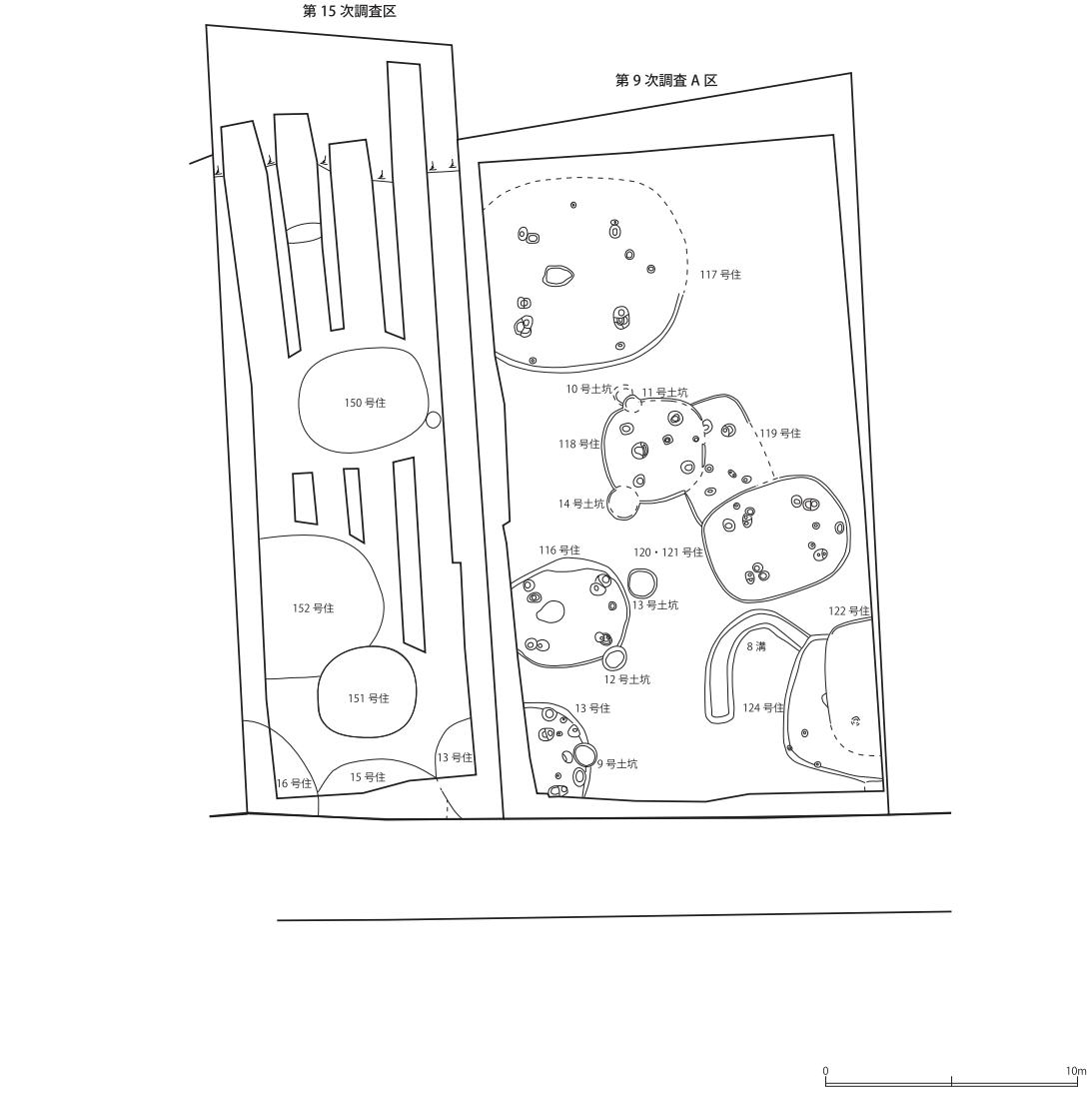
第 14 図　第 4・5 次調査 B 区全体図



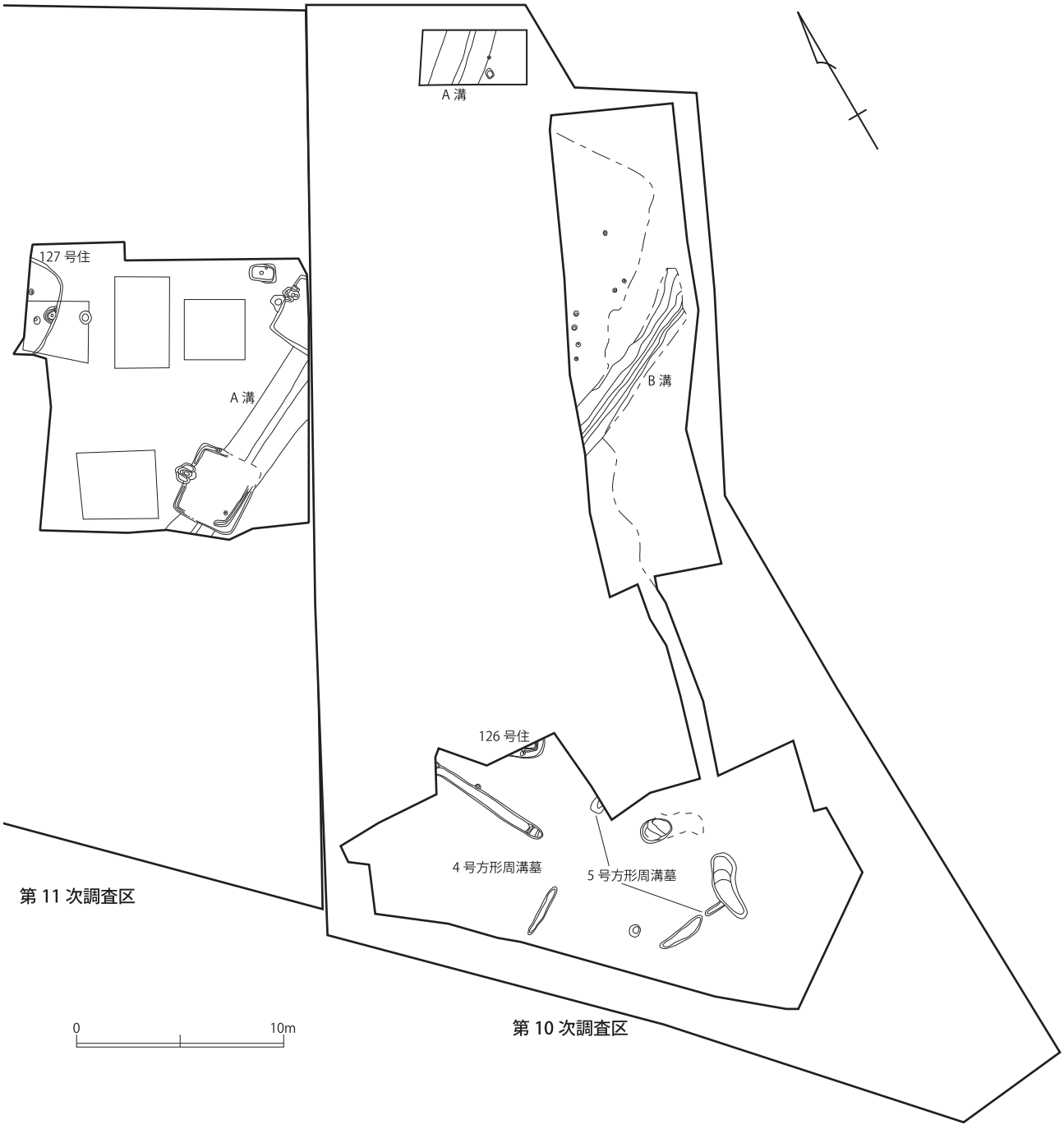
第 15 図　第 6・7 次調査区全体図



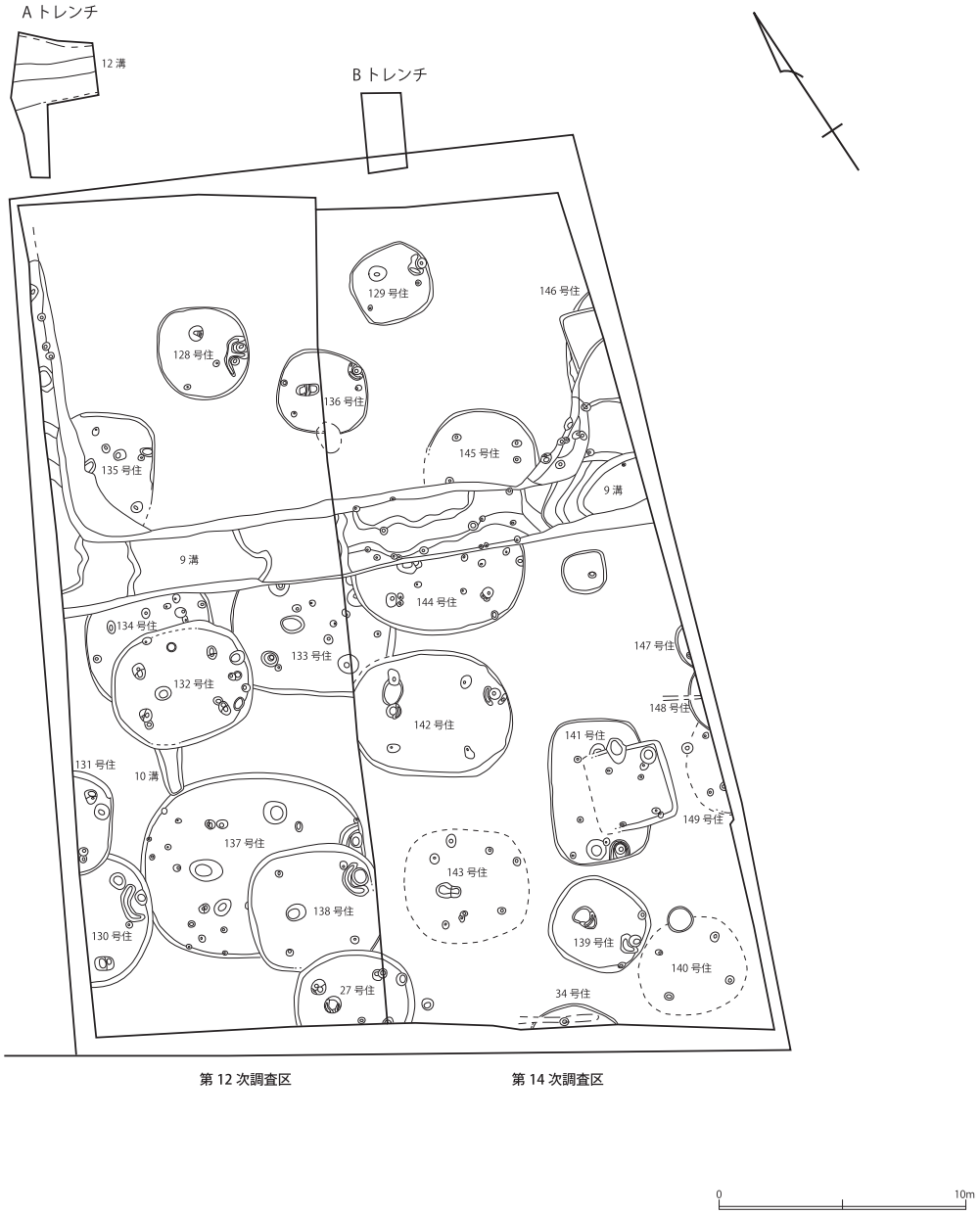
第 16 図　第８・９次調査Ｂ区全体図



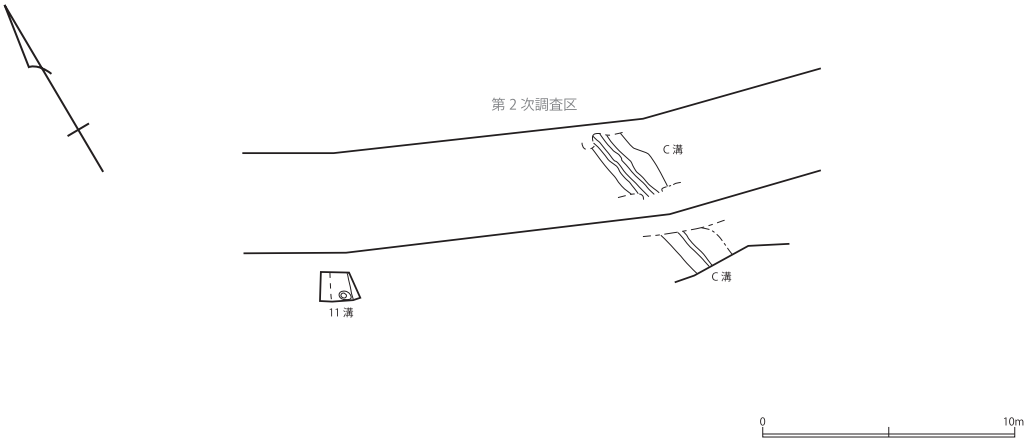
第 17 図　第 9 次調査 A 区・15 次調査区全体図



第 18 図　第 10・11 次調査区全体図



第19図　第12・14次調査区全体図



第 20 図　第 13 次調査区全体図

第６節　確認調査報告

確認調査は、埋蔵文化財の有無、範囲、性格等を把握することを目的として実施される。ここでは、盛土保存として遺構が保護されている地点、また埋蔵文化財包蔵地外ではあるが、埋蔵文化財の所在が見込まれた地点の確認調査結果を報告する。

（１）新倉３丁目 2837- １（第 10 次調査）地点（第 21 図）

事業主体者より 1999（平成 11）年４月 16 日付で和光市教育委員会に対し、宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年４月 28 日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉３丁目 2837- １で面積は 1,119 ㎡である。重機及び人力によりトレンチ１～８を入れる。その結果、現地表面 60 ～ 90 ㎝の深さで遺構を確認した。確認された遺構は、溝１条と複数の掘り込みである。

次いで、2004（平成 16）年 10 月 12 日付で和光市教育委員会に対し、再び宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年 10 月 22 日に確認調査を実施した。重機及び人力によりトレンチ９～ 16 を入れる。その結果、現地表面 70 ～ 105 ㎝の深さで遺構を確認した。確認した遺構は、溝３条と土坑２基である。

以上２回の確認調査からトレンチ１・２・９は第２次調査、トレンチ３・４・11 は第３次調査で検出された弥生時代の環濠の続きと推定される。なお、保護層 30 ㎝以上が保たれず現状保存が困難な道路拡張・新設部及び宅地造成を行う箇所については、第 10 次調査として発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。保護層が保たれる箇所は盛土保存とした。

（２）新倉３丁目 2829- １地点（第 22 図）

事業主体者より 2002（平成 14）年３月４日付で和光市教育委員会に対し、宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年３月 12・13・14 日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉３丁目 2829- １で面積は約 922 ㎡である。重機及び人力によりトレンチ１～ 10 を入れる。その結果、現地表面 45 ～ 159 ㎝の深さで遺構を確認した。確認された遺構は、住居跡９軒と溝３条である。トレンチ１・３・５・６・７の溝は、第２次調査及び第５次調査で検出された弥生時代の環濠の続きと推定される。トレンチ９・10 の溝

は近・現代の根切溝である。なお、申請書の宅地造成計画図によると保護層が保たれるため盛土保存とした。

（３）新倉３丁目 2811- １地点（特別緑地保全地区）の斜面上部（第 23・24 図）

事業主体者より 2002（平成 14）年４月 10 日付で和光市教育委員会に対し、分譲住宅建設に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年４月 18・19・22・23 日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉３丁目 2811- １で、面積は 2,380 ㎡の一部、斜面上部である。重機及び人力によりトレンチ１～ 13 を入れる。その結果、トレンチ１・11・12・13 の現地表面 65 ㎝～ 86 ㎝の深さで２条の溝を確認した。トレンチ１の溝は、東側へ延びると考えられる。トレンチ 11・12・13 は、１条の溝となる。なお、遺構が確認されたため分譲住宅建設は中止され、盛土保存となった。

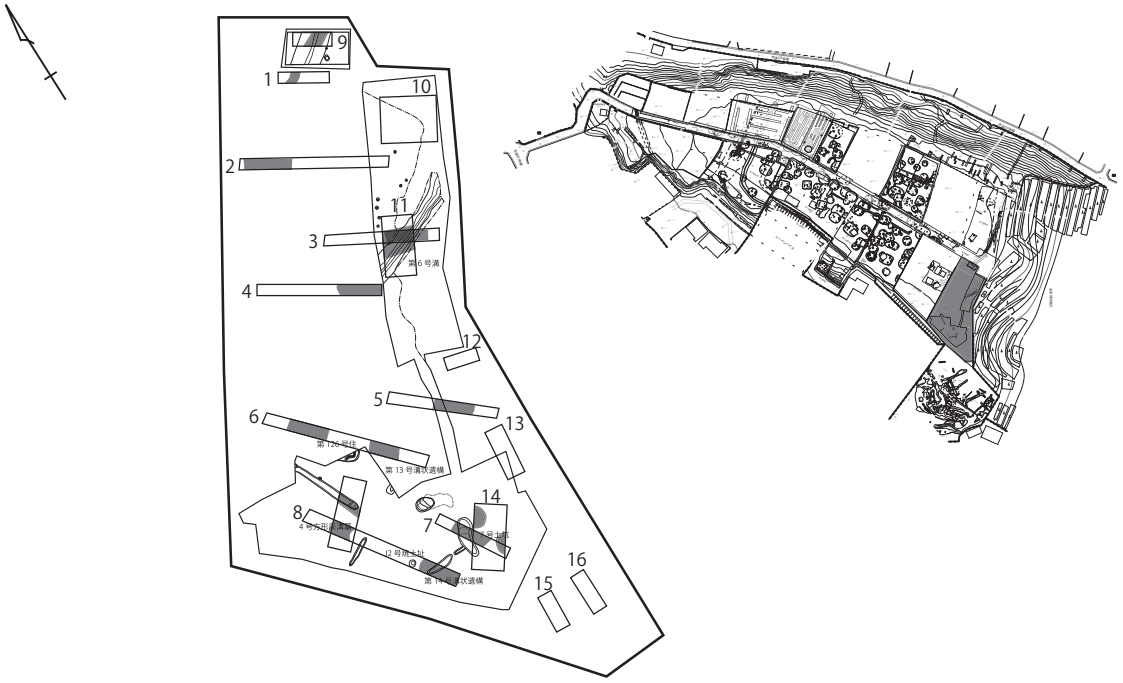
次いで、再び新倉３丁目 2811- １地点で和光市環境課より 2008（平成 20）年５月１日付で和光市教育委員会に対し、緑地整備に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年５月 16 日に計画予定地を中心に確認調査を行った。重機及び人力によりトレンチ 14 ～ 22 を入れる。その結果、トレンチ 14・15・20 の現地表面 70 ～ 140 ㎝の深さで遺構を確認した。トレンチ 14 では溝２条を確認し、そのうち１条の溝はトレンチ 15 の溝と接続する。トレンチ 20 は、以前の調査トレンチ 11・12・13 と接続し１条の溝となる。以上２回の調査から確認された遺構は溝４条である。なお、植樹・抜根及び天水桶等の仮設について、工事立会とした。

（４）新倉３丁目 2830- １地点（第 25 図）

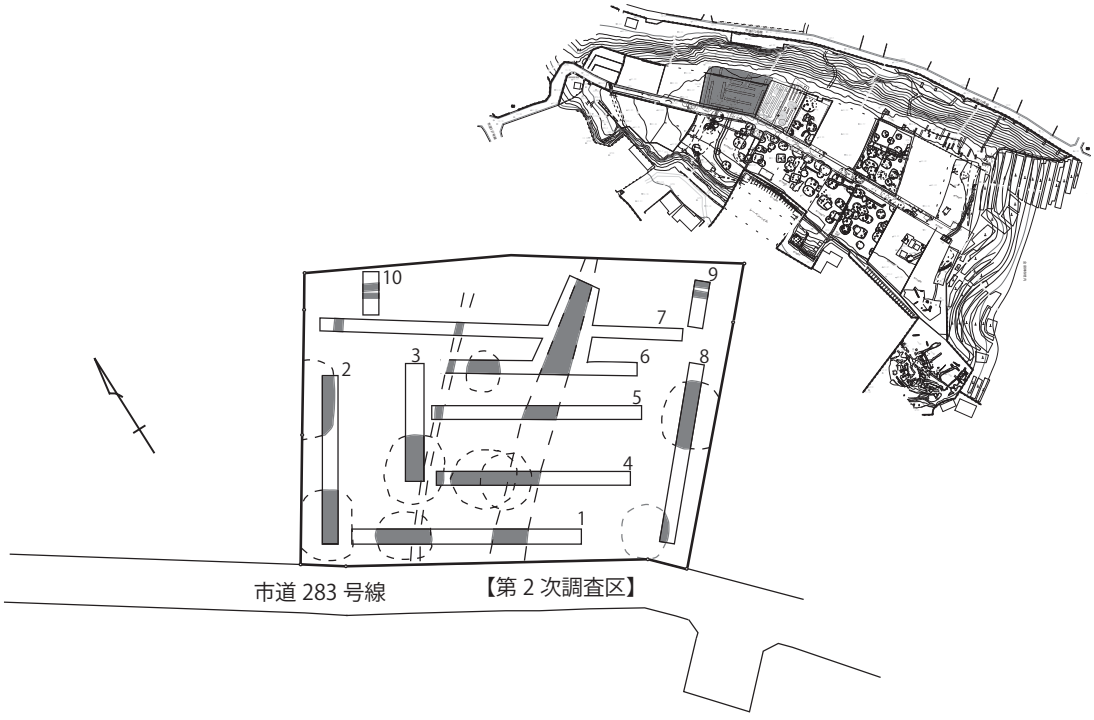
事業主体者より 2018（平成 30）年４月 13 日付で和光市教育委員会に対し、個人農地改良に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年５月 16・17 日に確認調査を行った。調査地点は、新倉３丁目 2830- １で、面積は 326 ㎡である。重機及び人力によりトレンチ１～９を入れる。その結果、現地表面 50 ㎝～ 80 ㎝の深さで遺構・遺物を確認した。確認された遺構は弥生時代とみられる住居跡５軒である。検出された住居跡は、第２次調査の第 16・17 号住居跡の続き、第 15 次調査の 152 号住居跡の続きと推定される。また、遺物は弥生時代土器を出土した（第 26 図・第５表）。なお、遺構・遺物が出土したため個人農地改良を中止し、盛土保存とした。

（５）新倉３丁目 2811- １地点（特別緑地保全地区）の斜面下部（第 23・24 図）

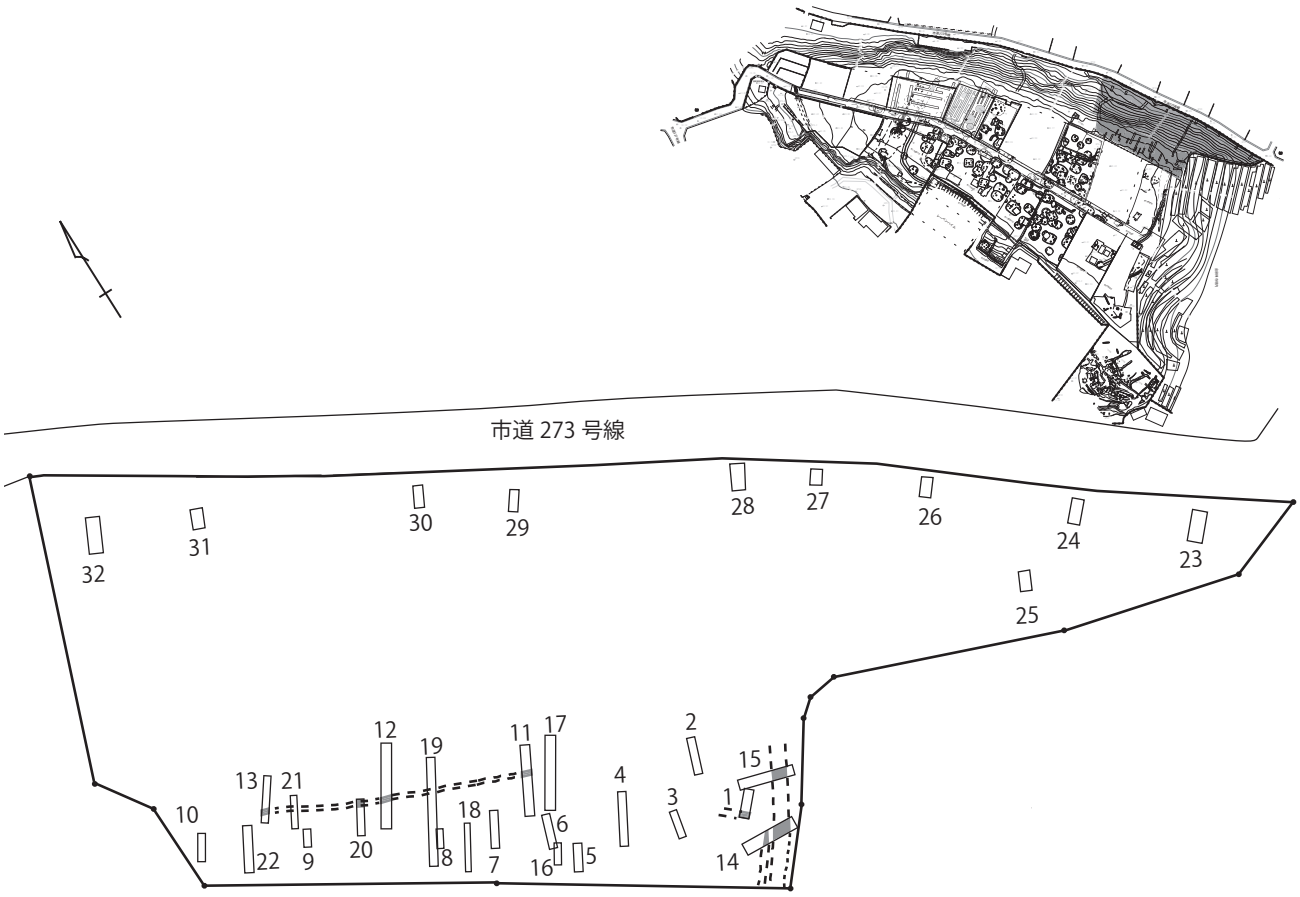
午王山遺跡隣接地として将来的保存・活用のため、遺構の広がりの確認調査を 2019（平成 31）年２月８日から３月 19 日まで行った。調査地点は、新倉３丁目 2811- １の斜面下部である。人力によりトレンチ 23 ～ 32 を入れる。その結果、東京層上部を検出し弥生時代の遺構・遺物は確認されなかった。しかし、近・現代の室の跡あるいは第１次調査で検出された地下道のような掘り込みを確認した。また、トレンチ 30 では上部から崩れてきた地層から中・近世の陶器を検出した。上記から、今回調査をしていない中腹には平場があり、今後確認調査が必要な箇所となる。



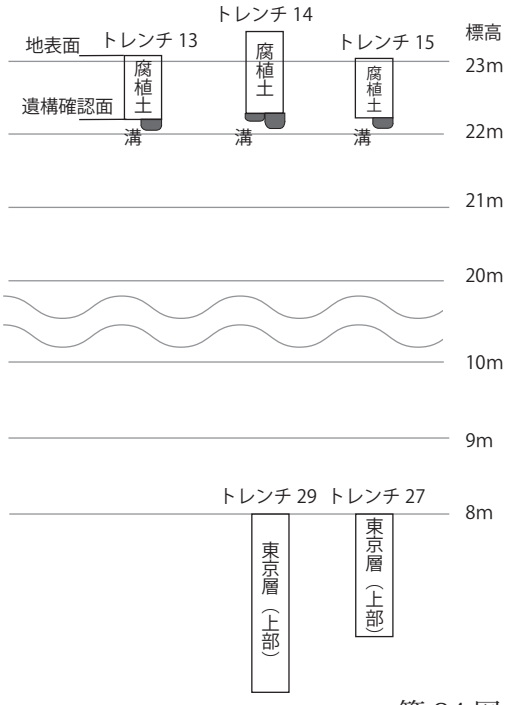
第 21 図　新倉 3 丁目 2837- 1 地点トレンチ配置図 (S=1/600)



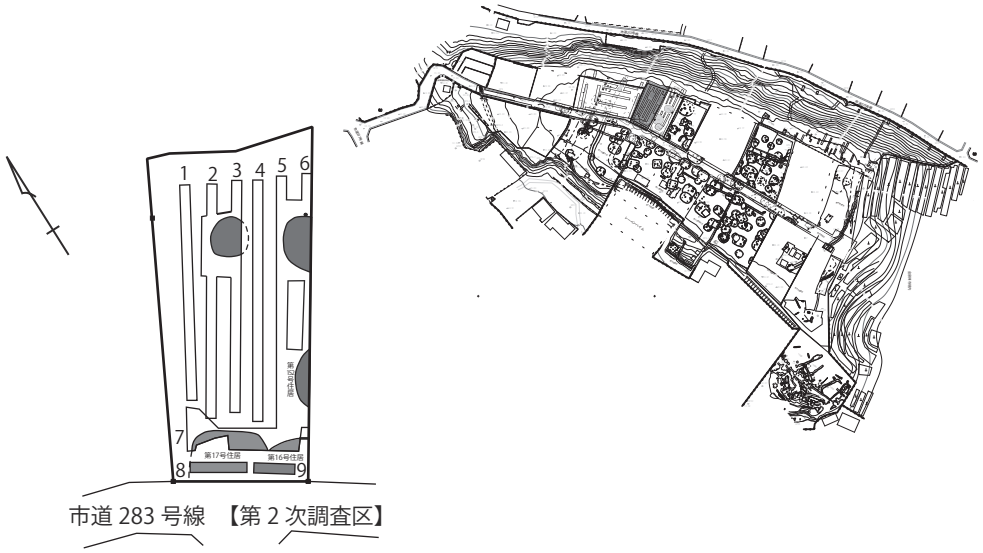
第 22 図　新倉 3 丁目 2829- 1 地点トレンチ配置図 (S=1/600)



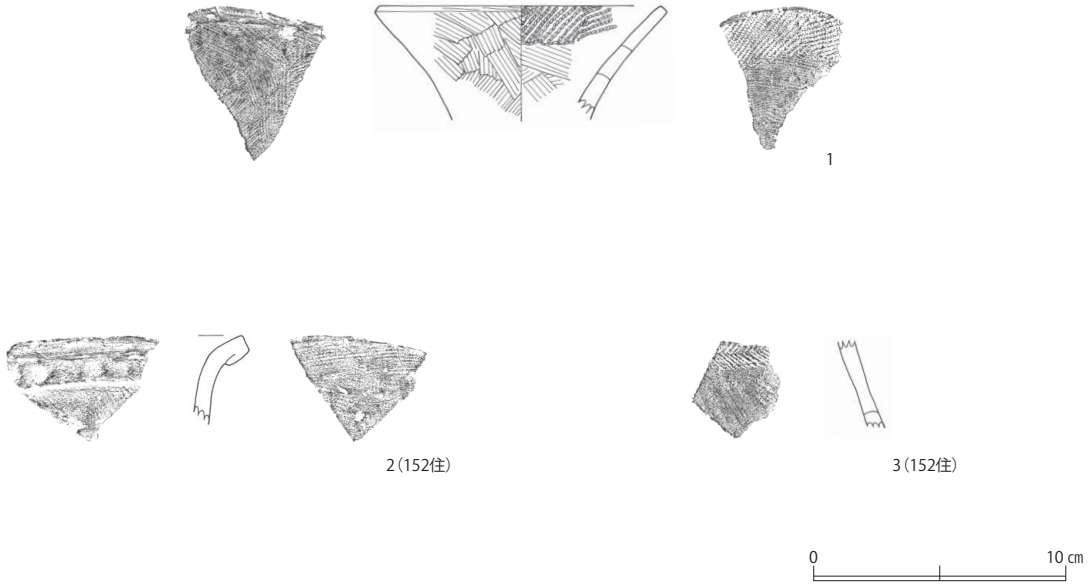
第 23 図　新倉３丁目 2811-１地点トレンチ配置図 (S=1/600)



第 24 図　新倉３丁目 2811-１地点トレンチ柱状図 (S=1/100)



第25図　新倉３丁目2830-１地点トレンチ配置図（S＝1/600）



第 26 図　新倉３丁目 2830-１地点出土遺物

第５表　新倉３丁目 2830−1 地点出土遺物観察表

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部面取り後横位ハケ目、口縁部外面斜位ハケ目、内面 LR 縄文、結節文、横･斜位ハケ目	A	良	褐色 10YR4/4	口径(11.6)
2	壺	折り返し口縁。口唇部面取り後横位ハケ目、口縁部指押圧痕、頸部斜位ハケ目	A･D･H	普	橙色 7.5YR7/6	第 152 号住居跡出土
3	壺	肩部ハケ刺突羽状文、斜位ヘラミガキ	A･H	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	第 152 号住居跡出土

第７節 第２次調査出土遺物補遺

午王山遺跡第２次調査の整理と報告書刊行については、1981（昭和 56）年に発掘調査が行われた後、整理担当者、整理場所の確保などの諸事情により、一時中断していたが、1992（平成４）年度に報告書刊行のための印刷製本費の予算化が決定し、報告書を刊行することとなった。しかし、報告書刊行に際しては、本文内容のページ数に限りがあること、実質的に整理期間が短期間であること等により、発掘調査担当者であった鈴木敏弘と教育委員会が協議を行い、調査区全体の遺構は掲載するが、遺物については遺構に伴い復元実測にて器形、時期区分などがわかるものを主として掲載することを確認した上で報告書作成を進め、1993（平成５）年３月に和光市埋蔵文化財調査報告書第９集『午王山遺跡発掘調査報告書』（第２次調査）として刊行した。その際に掲載を見送った破片資料については『和光市デジタルミュージアム紀要』に掲載することを念頭に少しずつ整理作業を進めた。

今回、本書を作成するに当たり、既刊報告の遺構出土遺物に加え、新たに未掲載となっていた破片資料（丸数字）を同縮尺にて追加し報告することとした（以下「補遺資料」という）。観察表（第６～ 27 表）を提示しているため、各遺構出土の遺物で主だったものを説明する。

第３号住居跡出土遺物（第 27 図・第６表）

第 27 図１は既報告の壺で、②～⑦は補遺資料である。②～④は壺であり、④には山形文がみられる。⑤は頸部に輪積痕を残す典型的な久ヶ原式の甕である。⑥・⑦は高坏であり、口縁直下に縄文が施されている。⑧は双角有孔土製品で、角あるいは耳の様な２か所の突起と焼成前穿孔が４か所あり動物の顔にもみえる土製品である。午王山遺跡で出土した土製品としては４点目である。

第６号住居跡出土遺物（第 28 図・第７表）

第 28 図①～③は補遺資料で、①･②は壺、③は甕ある。全てハケ目により器面が調整され、②にはハケ刺突羽状文が施されている。

第７号住居跡出土遺物（第 29 図・第８表）

第 29 図１は既報告の壺で、②～⑧は補遺資料である。②～⑤は壺で、⑥はハケ目の甕で、⑦・⑧はヘラナデの甕である。

第９号住居跡出土遺物（第 30 図・第９表）

第 30 図１～５は既報告の遺物である。⑥は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ鉢で体部には羽状縄文が施されている。

第 10 号住居跡出土遺物（第 31 図・第 10 表）

第 31 図１～５は既報告の遺物で、⑥・⑦は補遺資料で壺である。⑥はハケ刺突羽状文が口唇部、口縁部に施されている。⑦は折返し口縁を持つ壺で、口縁内面には櫛描波状文が施されている。

第 16 号住居跡出土遺物（第 32 図・第 11 表）

第 32 図１・２は既報告の遺物である。③～⑤は補遺資料で、④は壺でハケ刺突羽状文が頸部に施されている。

第 17 号住居跡出土遺物（第 33 図・第 12 表）

第 33 図①・②は補遺資料で、①は折返し様の口縁を持つ壺、②は頸部に沈線と縄文が施

される壺である。

第 18 号住居跡出土遺物（第 34 図・第 13 表）

第 34 図１～６は既報告の遺物である。⑦～⑨は補遺資料で、⑨は輪積痕が顕著にみられ、３と同様の久ヶ原式の甕である。

第 19 号住居跡出土遺物（第 35 図・第 14 表）

第 35 図１～８は既報告の遺物である。⑨は補遺資料で、ハケ刺突羽状文が施された壺の肩部である。

第 21 号住居跡出土遺物（第 36 図・第 15 表）

第 36 図①・②は補遺資料で、①は折返し口縁を持つ壺、②は肩部に羽状縄文が施されている。

第 22 号住居跡出土遺物（第 37 図・第 16 表）

第 37 図①は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ壺で内外面にハケ目が施されている。

第 23 号住居跡出土遺物（第 38 図・第 17 表）

第 38 図１は既報告の台付甕である。第２次調査報告では第 32 号住居跡出土とされていたが、遺物の再観察などを行ったところ、第 23 号住居跡の出土遺物であることが確認された。②・③は補遺資料で、②は壺でハケ刺突文が頸部に施されている。③は頸部に輪積痕がみられる甕である。

第 25 号住居跡出土遺物（第 39 図・第 18 表）

第 39 図①は補遺資料で、ハケ目が施される甕である。

第 30 号住居跡出土遺物（第 40 図・第 19 表）

第 40 図１～ 10 は既報告の遺物である。⑪・⑫は補遺資料で、⑪の肩部には縄文帯が施され、５・６と同様の壺である。

第 31 号住居跡出土遺物（第 41 図・第 20 表）

第 41 図①～③は補遺資料で、ともに壺である。②は縄文の文様帯下端を櫛描波状文で区画している。③はＳ字状結節文がみられる。ともに午王山遺跡の遺物の中では非常に珍しい土器である。

第 32 号住居跡出土遺物（第 42 図・第 21 表）

第 42 図①は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ壺で内外面にハケ目が施されている。

第 33 号住居跡出土遺物（第 43 図・第 22 表）

第 43 図①・②は補遺資料で、ともに壺である。②はハケ刺突羽状文と円形浮文が肩部に施されている。

第 36 号住居跡出土遺物（第 44 図・第 23 表）

第 44 図①～③は補遺資料で、①と③は同一個体である。①・②はともに口唇部面取り後キザミが施されるハケ目甕である。

第 43 号住居跡出土遺物（第 45 図・第 24 表）

第 45 図１は既報告の高坏である。②は補遺資料でハケ目甕である。

第 44 号住居跡出土遺物（第 46 図・第 25 表）

第 46 図１・２は既報告の甕である。ともに口唇部面取り後キザミが施されるハケ目甕で

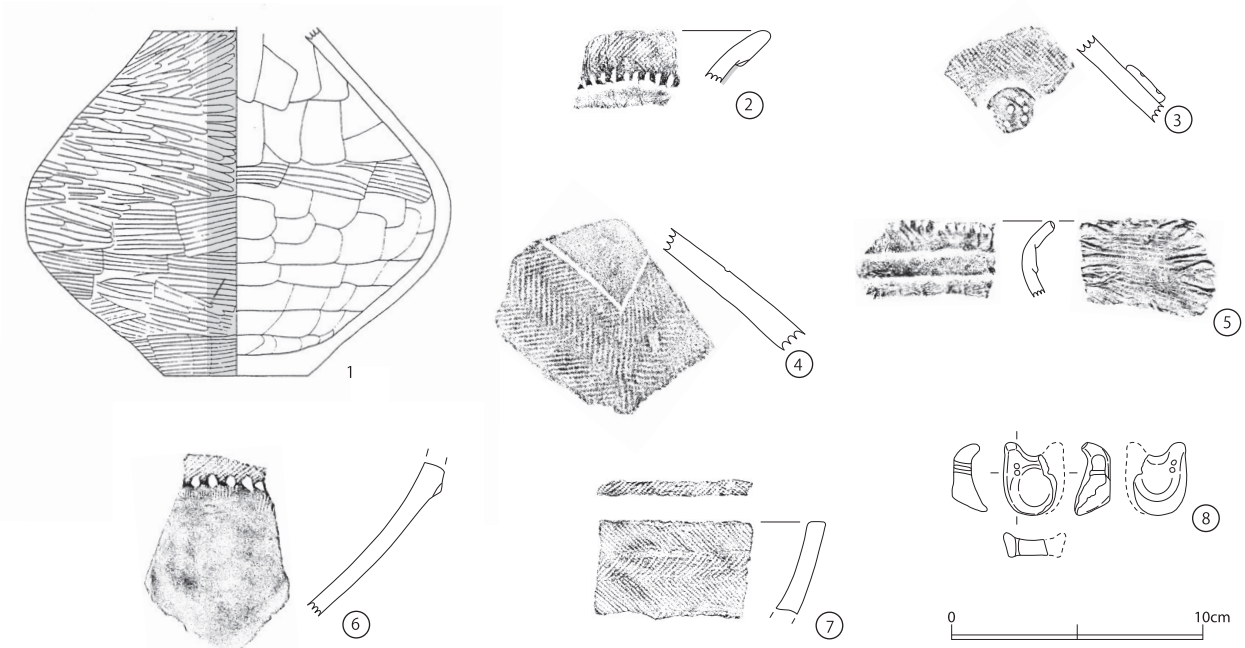
ある。③は補遺資料で、複合口縁に棒状浮文、ハケ目が施される壺である。

Ａ溝（第２次調査第２号溝）出土遺物（第 47 図・第 26 表）

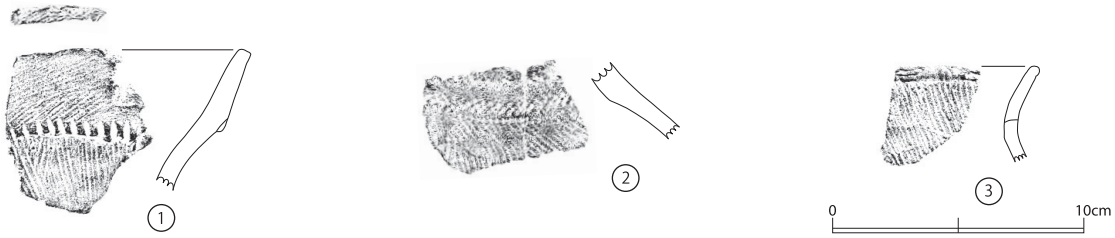
Ａ溝（第２次調査第２号溝）とは既報告の第２次調査区の第２号溝（旧番号）である。第 47 図１・２は既報告の壺である。③～⑦は補遺資料で、③・④は壺で頸部と肩部を画する様に段差を持った羽状の擬似縄文が施されている。⑤は沈線区画と羽状縄文、⑥はハケ刺突羽状文による擬似縄文、⑦は口唇部が面取りされキザミが施されている甕である。

第２次調査区出土遺物（第 48 図・第 27 表）

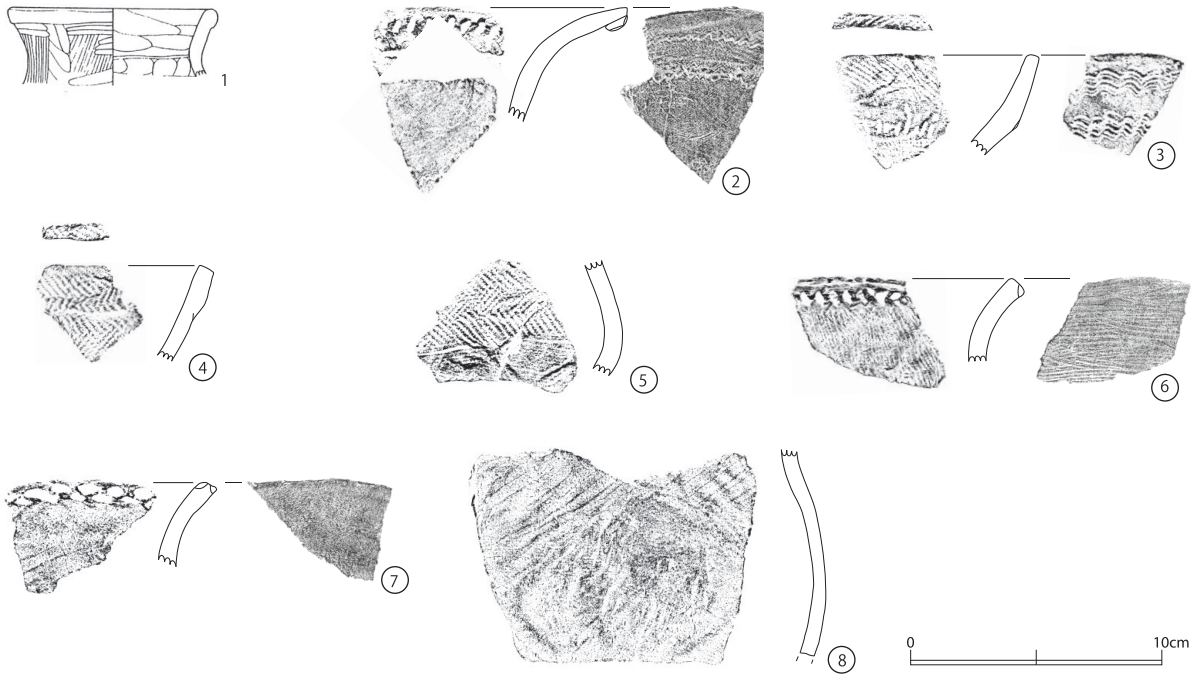
第 48 図①は補遺資料である。壺破片で、沈線区域内に羽状縄文 RL-RL が充填されハケ目調整後ヘラミガキが施されている。文様帯部分に種子圧痕がみられる。出土位置は２次調査区Ｑ区一括である。



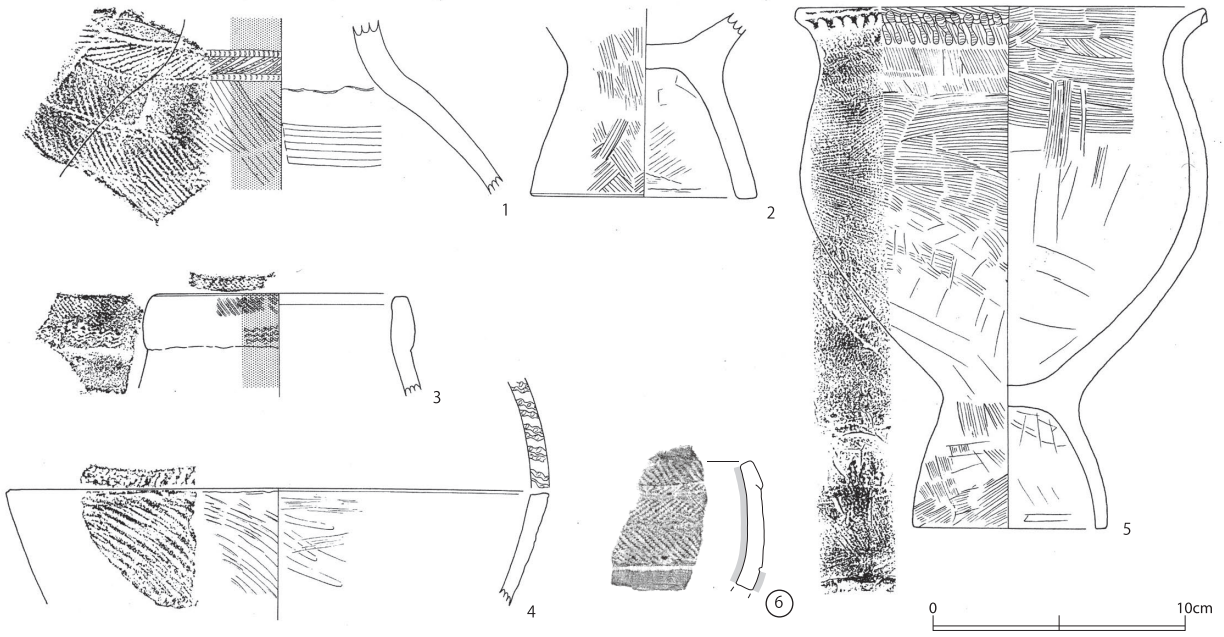
第 27 図　第 3 号住居跡出土遺物



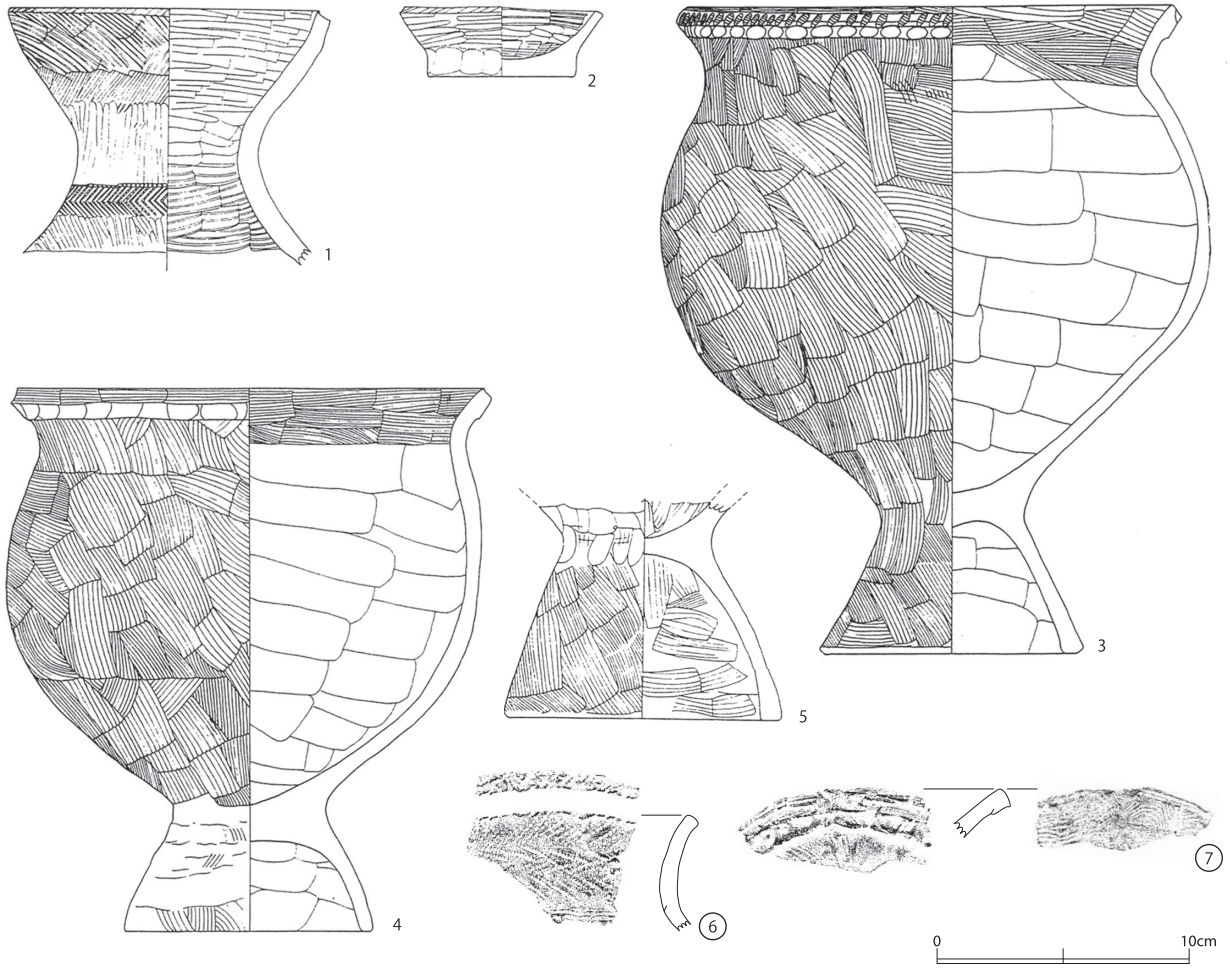
第 28 図　第 6 号住居跡出土遺物



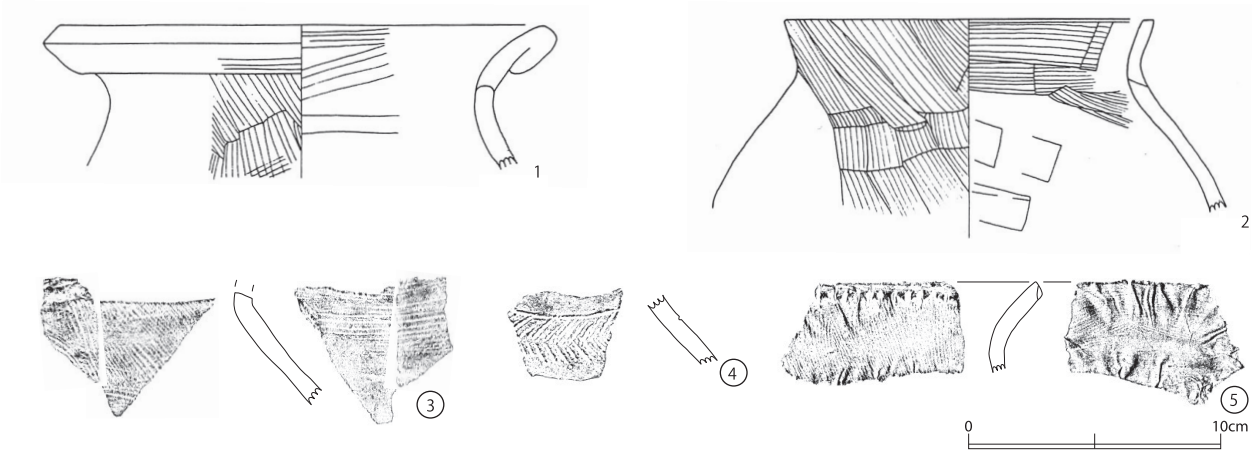
第 29 図　第 7 号住居跡出土遺物



第 30 図　第９号住居跡出土遺物

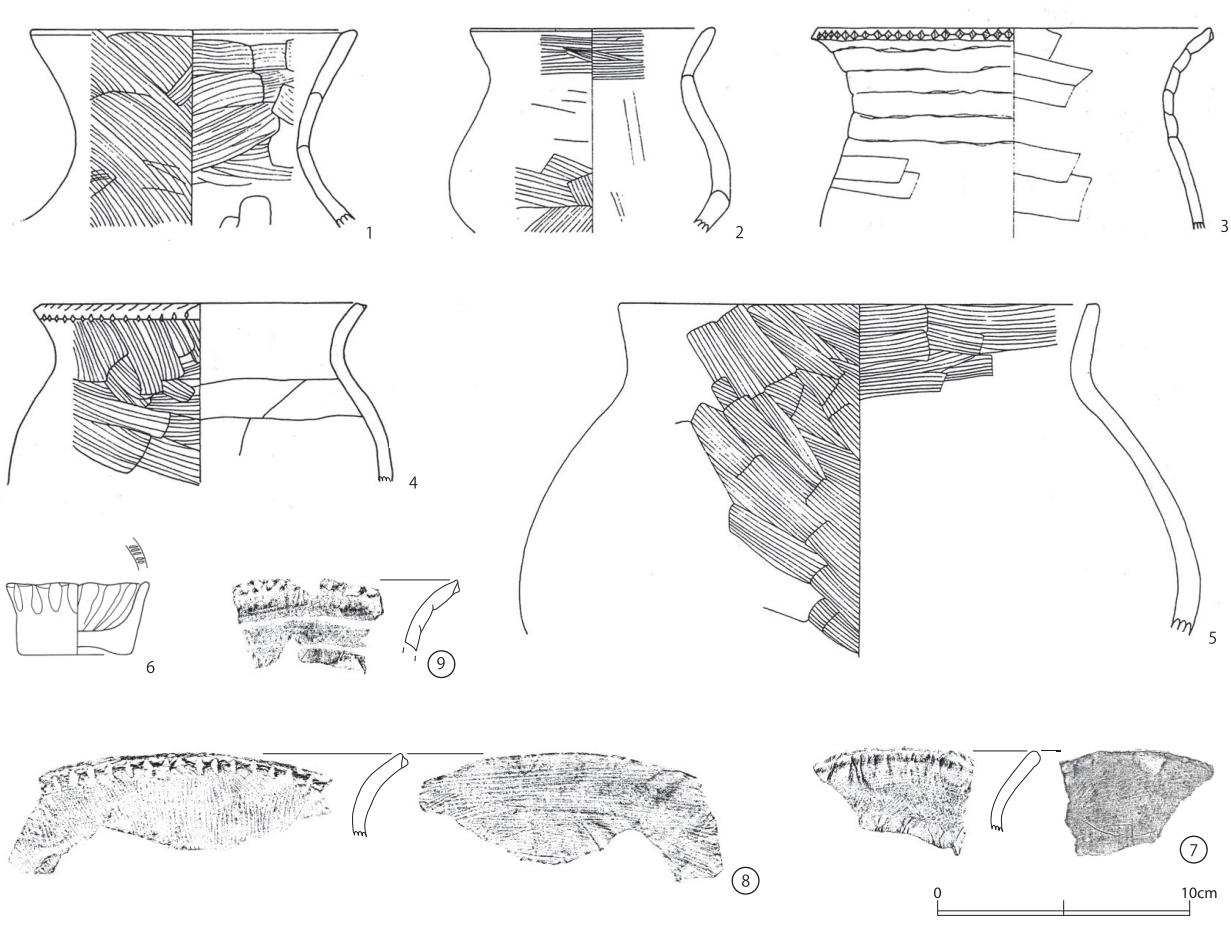


第 31 図　第 10 号住居跡出土遺物

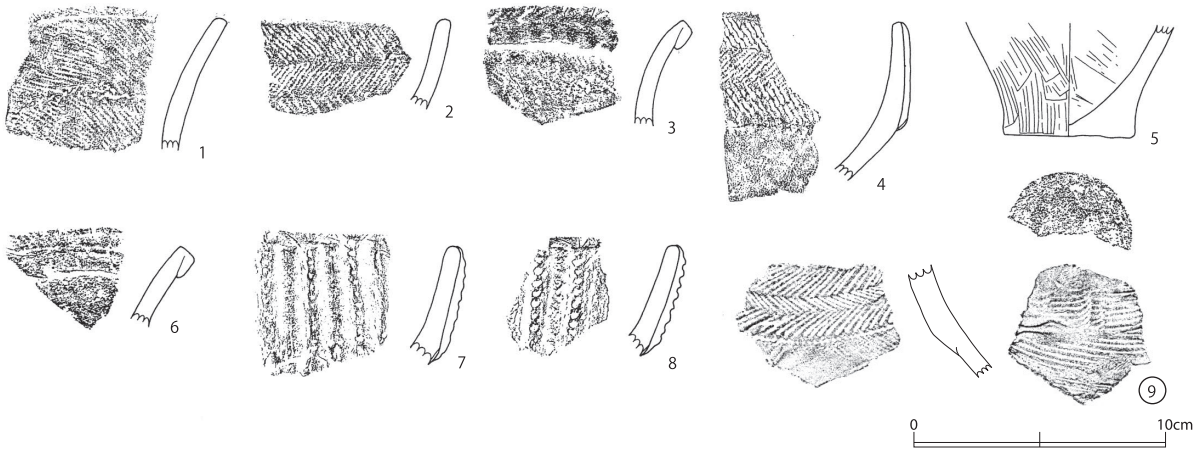


第 32 図　第 16 号住居跡出土遺物

第 33 図　第 17 号住居跡出土遺物

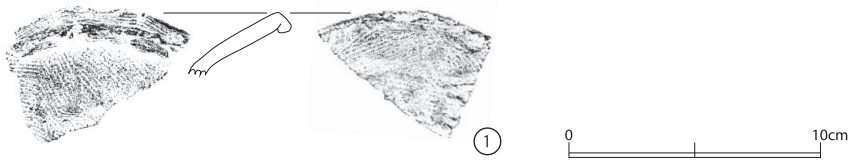


第 34 図　第 18 号住居跡出土遺物

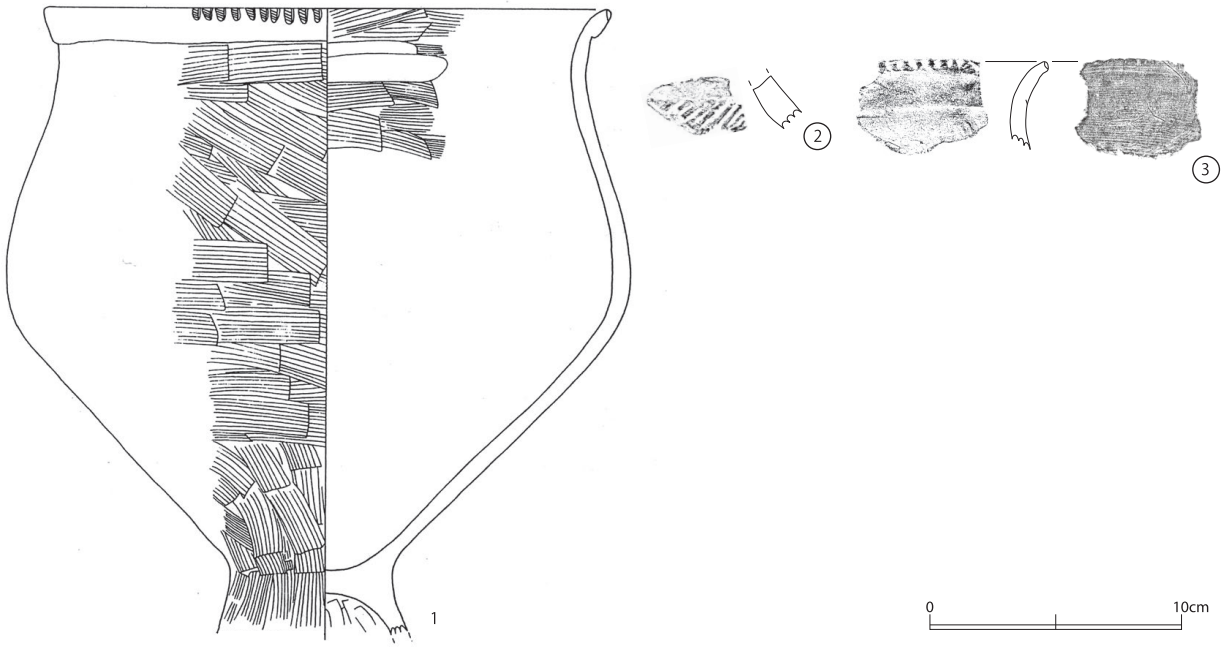


第 35 図　第 19 号住居跡出土遺物

第 36 図　第 21 号住居跡出土遺物

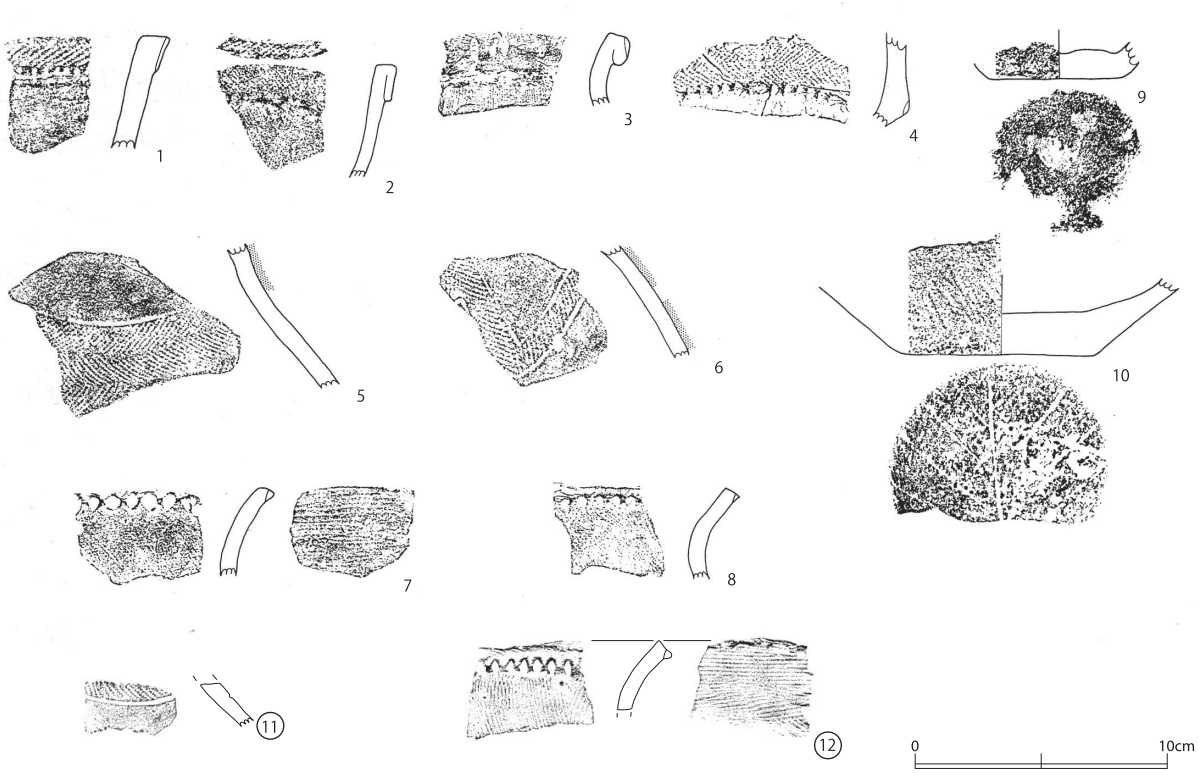


第 37 図　第 22 号住居跡出土遺物

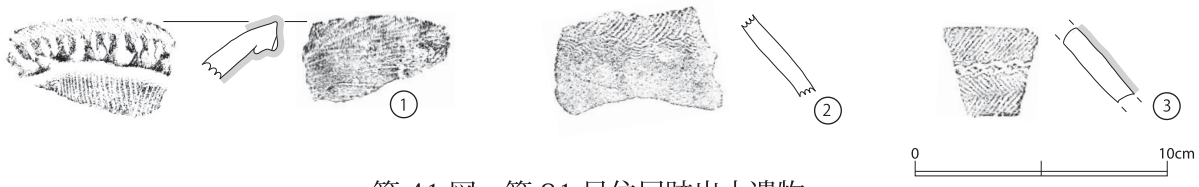


第 38 図　第 23 号住居跡出土遺物

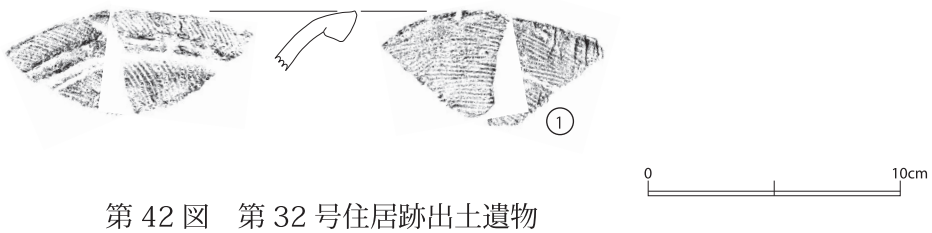
第 39 図　第 25 号住居跡出土遺物



第 40 図　第 30 号住居跡出土遺物

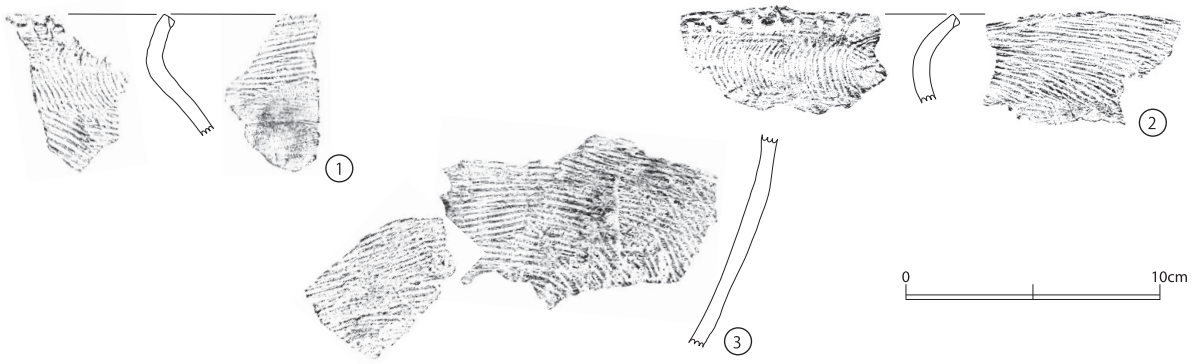


第 41 図　第 31 号住居跡出土遺物

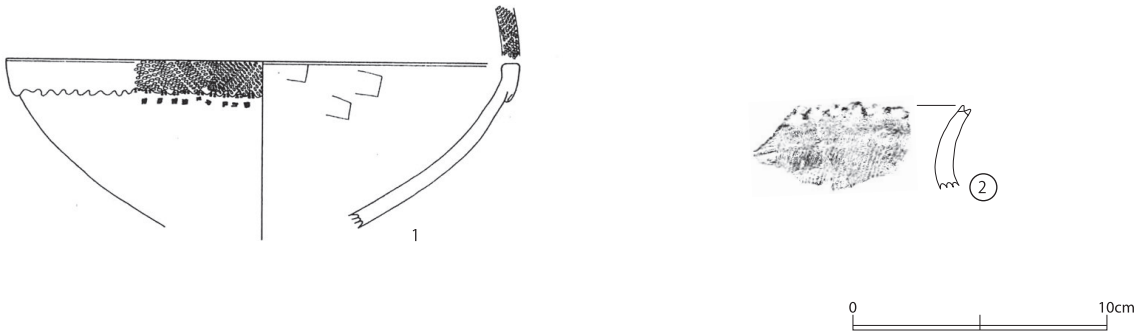


第 42 図　第 32 号住居跡出土遺物

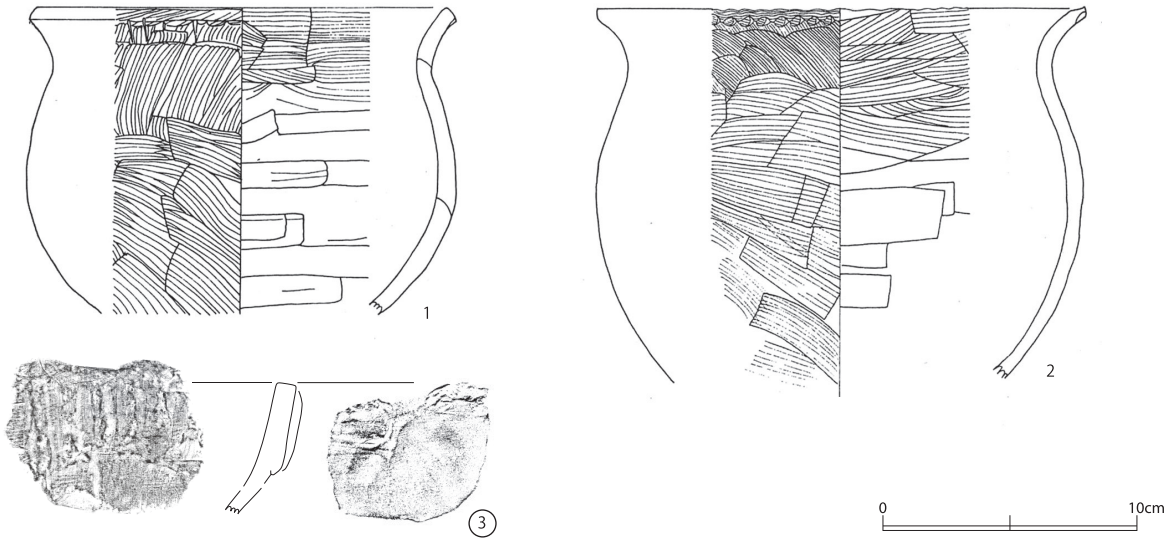
第 43 図　第 33 号住居跡出土遺物



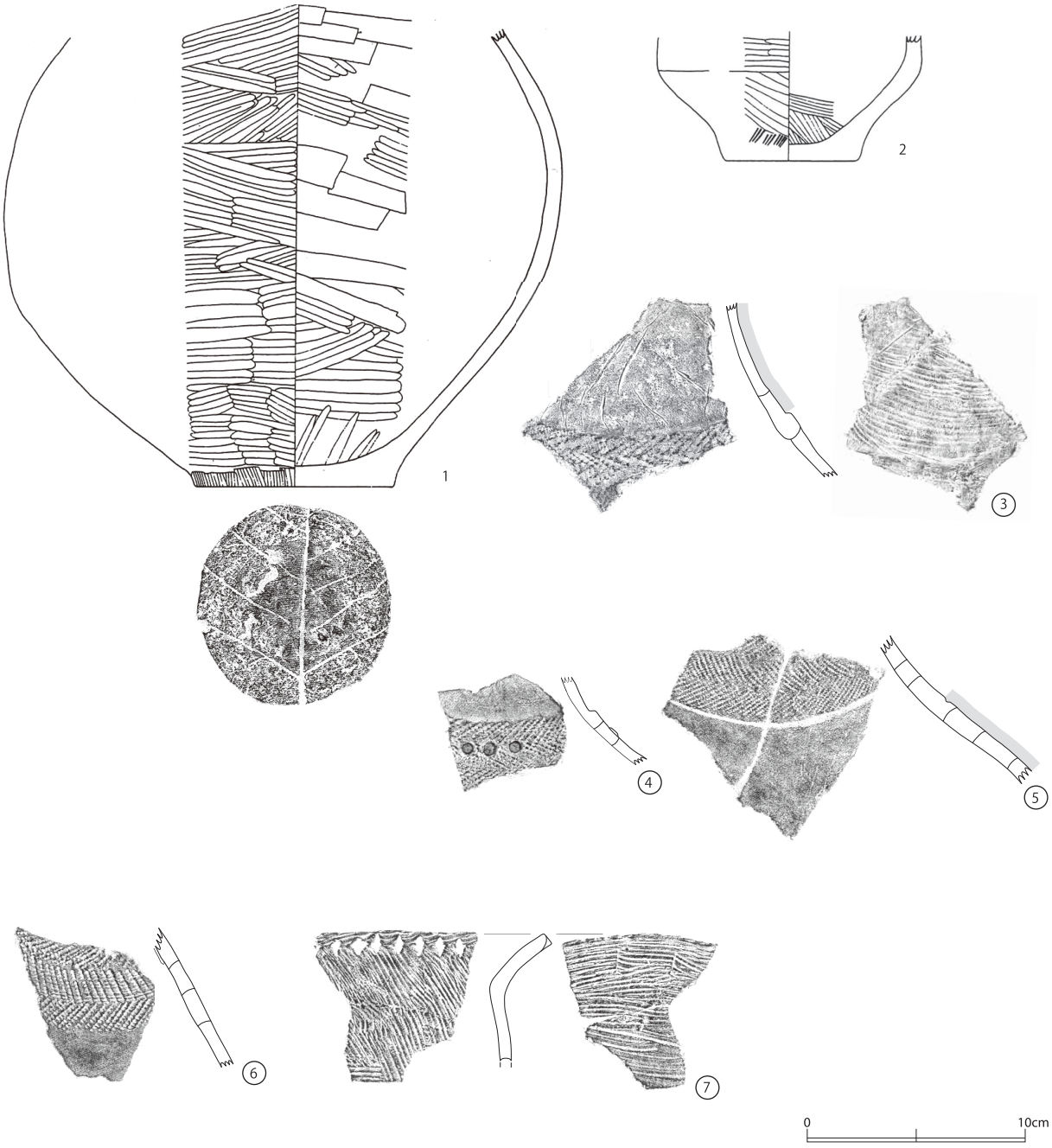
第 44 図　第 36 号住居跡出土遺物



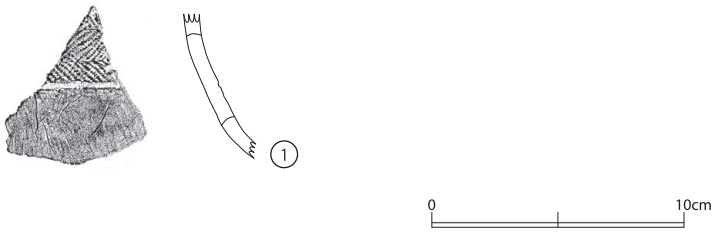
第 45 図　第 43 号住居跡出土遺物



第 46 図　第 44 号住居跡出土遺物



第 47 図　A 溝（第 2 次調査第 2 号溝）出土遺物



第 48 図　第 2 次調査区出土遺物

第６表　第３号住居跡出土遺物観察表　　№②～⑧補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	横・斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後横位ヘラナデ、胴部外面赤色塗彩	A	普	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済№2 底径5.7
②	壺	折り返し口縁。LR･RL羽状縄文、下端にキザミ、頸部赤色塗彩	A	良	黄褐色 10YR5/6	
③	壺	RL･LR羽状縄文、刺突を施した円形浮文貼付け	A	良	橙色 7.5YR6/6	
④	壺	沈線区画による山形文、LR･RL･LR羽状縄文	A･I	良	黄橙色 10YR7/6	
⑤	甕	口唇部キザミ、指押圧痕、輪積痕顕著、内面横位ハケ目	A･B	良	にぶい黄橙色 10YR7/3	
⑥	高坏	口縁部LR縄文、下端に縄文原体を押捺、体部縦位ハケ目後縦位ヘラミガキ	A	良	褐灰色 10YR4/1	
⑦	高坏	口唇部面取り後LR縄文、口縁部RL･LR羽状縄文を2段、縄文帯下端に結節文	A	良	明黄褐色 10YR7/6	

No.	器種	長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重さ(g)	備考
⑧	双角有孔土製品	2.9	(2.4)	0.2	6.0	焼成前穿孔

第７表　第６号住居跡出土遺物観察表　　№①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	口唇部ハケ刺突文、口縁部斜位ハケ目、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目	A	普	にぶい褐色 7.5YR5/4	
②	壺	ハケ刺突羽状文、斜位ハケ目	A	普	橙色 7.5YR6/8	
③	甕	外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	灰黄褐色 10YR4/2	

第８表　第７号住居跡出土遺物観察表　　№②～⑧補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	折り返し口縁。外面縦位ハケ目後縦・横位ヘラミガキ。内面横位ハケ目後縦・斜位ヘラナデ	A	良	黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済№5 口径(8.3)
②	壺	折り返し口縁。口唇部横位ハケ目、下端にキザミ、口縁部指押圧痕、頸部斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後櫛描波状文、斜位ヘラミガキ	A･D	良	褐色 7.5YR4/6	
③	壺	口唇部LR縄文、口縁部RL縄文、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目、内面櫛描波状文	A	普	橙色 7.5YR6/8	
④	壺	折り返し口縁。口唇部RL縄文、口縁部RL･LR･RL羽状縄文、頸部RL･LR羽状縄文	A	普	にぶい黄橙色 10YR7/3	№5と同一個体か

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
⑤	壺	横位ハケ目、RL･LR･RL 羽状縄文	A	普	にぶい黄橙色 10YR7/4	No.4 と同一個体か
⑥	甕	口唇部面取り後キザミ、頸部縦位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	
⑦	甕	口唇部内外からキザミ、口頸部内外面横位ヘラナデ	A･I	良	橙色 7.5YR6/6	No.8 と同一個体か
⑧	甕	横･斜位ヘラナデ(一部に LR 縄文あり)	A･I	良	橙色 7.5YR6/6	No.7 と同一個体か

第９表　第９号住居跡出土遺物観察表　　No.⑥補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突文、肩部斜位ハケ目、赤色塗彩。内面横位ヘラナデ	A･C	良	橙色 7.5YR6/8	6 次 23 集報告済No.1
2	台付甕	外面縦･斜位ハケ目、内面斜位ハケ目	A･B･C	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	6 次 23 集報告済No.2 底径(9.0)
3	壺	折り返し口縁。口唇部 RL 縄文、口縁部 RL 縄文、結節文、赤色塗彩、内面横位ヘラナデ	A･C･D	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	6 次 23 集報告済No.3 口径(10.3)
4	鉢	口唇部面取り後ハケ刺突文、体部粗い斜位ハケ目、内面横･斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A･B･C	良	橙色 5YR6/6	6 次 23 集報告済No.4 口径(21.5)
5	台付甕	口唇部面取り後キザミ、頸部外面縦位ハケ目、胴部外面横位ハケ目、内面横・斜位ハケ目、脚部縦・斜位ハケ目内面ヘラナデ	A･B･C	良	褐色 10YR4/6	6 次 23 集報告済No.5 口径(16.4) 器高 20.3 底径(7.8)
⑥	鉢	折り返し口縁。口縁部 RL 縄文、体部 LR･RL 羽状縄文、縄文帯下端に結節文、横位沈線区画以下横位ヘラミガキ、外面一部および内面赤色塗彩	A	普	にぶい黄橙色 10YR6/4	

第 10 表　第 10 号住居跡出土遺物観察表　　No.⑥・⑦補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部面取り後斜位ハケ目。口縁部斜位ハケ目、頸部縦位ヘラミガキ、肩部横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突羽状文、縦位ヘラミガキ、内面横位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	2 次 9 集報告済No.7 口径 12.6
2	鉢	口唇部面取り後斜位ハケ目、内外面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A	良	明褐色 7.5YR5/6	2 次 9 集報告済No.8 内面黒 口径 8.0 器高 2.7 底径 5.8

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	台付甕	口唇部面取り後キザミ、下端に指押圧痕、外面縦･斜位ハケ目、口縁部内面横･斜位ハケ目、胴部内面横位ヘラナデ	A･D･F	普	明黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.9 口径19.8 器高25.6 底径10.3
4	台付甕	口唇部面取り後横位ハケ目、下端に指押圧痕、外面縦・斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部内面横位ヘラナデ	A･D･F	良	明黄褐色 10YR7/6	2次9集報告済No.10 口径18.8 器高21.3 底径9.7
5	台付甕	脚台部内外面縦位ハケ目、脚部外面縦･斜位ハケ目、内面縦･横位ハケ目	A･G	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	2次9集報告済No.11 底径10.8
⑥	壺	単口縁。口唇部ハケ刺突文、口縁部ハケ刺突羽状文、横位ハケ目	A･D･F	良	明褐色 7.5YR5/6	
⑦	壺	折り返し口縁。口縁部指押圧痕、頸部縦･斜位ハケ目、内面櫛描波状文、横位ハケ目	A	良	明黄褐色 10YR7/6	

第11表　第16号住居跡出土遺物観察表　　No.③～⑤補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	鉢	折り返し口縁。口縁部横位ハケ目、頸部縦･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良		2次9集報告済No.13 口径(20.2)
2	甕	口唇部面取り。外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･B･C	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	2次9集報告済No.14 口径(14.6)
③	壺	外面横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	橙色 7.5YR6/6	
④	壺	横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突羽状文	A	良	黄橙色 7.5YR7/8	
⑤	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	

第12表　第17号住居跡出土遺物観察表　　No.①・②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。口唇部斜位ハケ目、頸部縦･斜位ハケ目	A	良	橙色 7.5YR6/8	
②	壺	横位ヘラミガキ、横位沈線区画、RL縄文	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第13表　第18号住居跡出土遺物観察表　　No.⑦～⑨補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。斜位ハケ目後やや粗い斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目	A･B･C	良	黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.15 口径(13.0)
2	鉢	外面横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･B･C	良	黄褐色 10YR5/6	2次9集報告済No.16 口径(9.6)
3	甕	口唇部面取り後キザミ、輪積痕顕著、内外面横位ハケ目	A･B･D	良	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済No.17 口径(15.8)

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･B･D	良	黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.18 口径(13.0)
5	甕	外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･B･C･D	良	明黄褐色 10YR7/6	2次9集報告済No.19 口径(19.0)
6	手捏形土器	指頭によるナデと押さえによる整形。口唇部に細かいキザミ、口縁下端に内側より焼成前穿孔	A･C	良	明黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.20 口径5.6 器高2.8 底径4.4
⑦	壺	単口縁。横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	灰黄褐色 10YR4/2	
⑧	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･D	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	
⑨	甕	口唇部面取り後キザミ、輪積痕顕著	A･I	普	にぶい黄褐色 10YR4/3	

第14表　第19号住居跡出土遺物観察表　　No.⑨補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。口唇部にRL縄文。外面S字状結節文に区画されたRL･LR縄文	A･B･C	良	にぶい黄橙色 10YR6/3	9次35集報告済No.1
2	壺	単口縁。外面RL･LR･RL羽状縄文	A･C･D･I	良	橙色 5YR6/8	9次35集報告済No.2
3	壺	折り返し口縁。口唇部にLR縄文。頸部外面ハケ目後斜位ヘラナデ	A･C･D	良	橙色 5YR6/8	9次35集報告済No.3
4	壺	複合口縁。複合部にRL･LR･RL羽状縄文、下端にキザミ、頸部外面横･縦位ヘラミガキ	A･C･D	良	橙色 5YR6/6	9次35集報告済No.4
5	甕	平底。外面縦･斜位ハケ目、内面斜位ヘラナデ	A･C･I	良	黒褐色 10YR2/3	9次35集報告済No.5 底径(5.2)
6	壺	折り返し口縁。口唇部にRL縄文。口縁部外面横位ヘラナデ、頸部外面斜位ヘラナデ	A･C･D	良	橙色 5YR6/6	9次35集報告済No.6
7	壺	複合口縁。複合部にキザミを有する棒状浮文、下端にキザミ	A･C	良	橙色 5YR6/8	9次35集報告済No.7
8	壺	複合口縁。複合部にキザミを有する棒状浮文	A･C･D	良	明赤褐色 5YR5/6	9次35集報告済No.8
⑨	壺	ハケ刺突羽状文・横位ハケ目沈線区画、肩部斜位ハケ目後横位ヘラミガキ、内面横位ハケ目	A･H	良	明赤褐色 5YR5/6	

第15表　第21号住居跡出土遺物観察表　　No.①･②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。RL･LR羽状縄文、下端にキザミ、頸部斜位ハケ目	A	普	橙色 5YR6/8	

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
②	壺	頸部 RL 縄文後斜位ヘラミガキ、横位沈線区画、肩部 RL･LR 羽状縄文、内面斜位ハケ目	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第 16 表　第 22 号住居跡出土遺物観察表　　No.①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。頸部斜位ハケ目、内面横･斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	

第 17 表　第 23 号住居跡出土遺物観察表　　No.②・③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	台付甕	口縁部折り返し口縁。口唇部キザミ、外面縦･横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･C	良	黒褐色 10YR2/2	2 次 9 集報告済No.1
②	壺	頸部縦位ヘラミガキ、横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突文	A	良	褐灰色 10YR4/1	
③	甕	口唇部キザミ、頸部輪積痕、横位ハケ目、内面横位ハケ目	A･D	良	橙色 7.5YR6/6	

第 18 表　第 25 号住居跡出土遺物観察表　　No.①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	甕	口唇部キザミ、頸部斜位ハケ目後横位ヘラナデ、胴部縦･斜位ハケ目、内面横位ハケ目後横･斜位ヘラナデ	A･D･I	良	明黄褐色 10YR6/6	

第 19 表　第 30 号住居跡出土遺物観察表　　No.⑪・⑫補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部 LR 縄文、口縁部下端にキザミ、頸部横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A･D	良	橙色 7.5YR7/6	5 次 18 集報告済No.1
2	壺	折り返し口縁。口唇部 LR 縄文、口縁部 RL 縄文、頸部斜位ハケ目	A･C･D	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	5 次 18 集報告済No.2
3	壺	折り返し口縁。口唇部横位ハケ目、下端にキザミ、頸部縦･斜位ハケ目	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5 次 18 集報告済No.3
4	壺	複合口縁、口縁部 LR･RL 羽状縄文、下端にキザミ	A･C	良	明黄褐色 10YR6/6	5 次 18 集報告済No.4
5	壺	肩部横位ヘラミガキ、横位沈線区画、LR･RL･LR 羽状縄文、一部赤色塗彩	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5 次 18 集報告済No.5
6	壺	肩部縦・斜位ヘラミガキ、沈線区画による山形文、区画内 LR 縄文を充填、赤色塗彩	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5 次 18 集報告済No.6
7	甕	口唇部面取り後棒状工具によるキザミ、外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･C･D	良	黒褐色 10YR3/2	5 次 18 集報告済No.7
8	甕	口唇部面取り後キザミ、外面斜位ハケ目	A･C･D	良	灰黄褐色 10YR4/2	5 次 18 集報告済No.8

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	壺	風化が著しい	A･C	良	灰黄褐色 10YR5/2	5次18集報告済No.9 底径5.0
10	壺	斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ、底部木葉痕	A･C	良	明褐色 7.5YR5/6	5次18集報告済No.10 底径7.5
⑪	壺	RL縄文、横位沈線区画、肩部横位ヘラミガキ	A	良	明黄褐色 10YR6/6	
⑫	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦位ハケ目、内面横･斜位ハケ目	A	良	にぶい黄褐色 10YR5/4	

第20表　第31号住居跡出土遺物観察表　　No.①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。口縁部斜位ハケ目、下端にキザミ、指押圧痕。頸部縦･斜位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ、外面および内面一部赤色塗彩	A	良	橙色7.5YR6/6	
②	壺	LR縄文、櫛描波状文、斜位ハケ目後横位ヘラナデ	A	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	
③	壺	LR縄文、2段の結節文、RL･LR羽状縄文、赤色塗彩	A	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	

第21表　第32号住居跡出土遺物観察表　　No.①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A･H	普	黄橙色 7.5YR7/8	

第22表　第33号住居跡出土遺物観察表　　No.①･②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。RL縄文、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A･D	普	にぶい黄橙色 10YR7/3	
②	壺	ハケ刺突羽状文、円形浮文貼付け	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第23表　第36号住居跡出土遺物観察表　　No.①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A	良	明褐色 7.5YR5/6	No.3と同一個体
②	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦･横･斜位ハケ目、内面横･斜位ハケ目	A	良	橙色7.5YR6/6	
③	甕	外面横･斜位ハケ目	A	良	明褐色 7.5YR5/6	No.1と同一個体

第 24 表　第 43 号住居跡出土遺物観察表　　No.②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	高坏	折り返し口縁。口唇部面取り後 LR 縄文、口縁部 RL 縄文･LR 縄文、下端に縄文原体を押捺、体部横･斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A･C･D	良	にぶい黄橙色 10YR7/4	2 次 9 集報告済No.23
②	甕	口唇部キザミ、頸部横位ヘラナデ、胴部縦位ハケ目	A	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	

第 25 表　第 44 号住居跡出土遺物観察表　　No.③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦･斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A･B･C	良	橙色 7.5YR6/6	2 次 9 集報告済No.24 口径(16.2)
2	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横･斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A･B	良	明褐色 7.5YR5/6	2 次 9 集報告済No.25 口径(19.2)
③	壺	複合口縁。口唇部 RL 縄文、口縁部横位ハケ目、5 本一組(推定･単位不明)の棒状浮文貼付け、頸部横位ハケ目、内面横位ヘラミガキ	A	良	明黄褐色 10YR6/6	

第 26 表　A溝出土遺物観察表　　No.③～⑦補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	外面縦･斜位ハケ目後横･斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ、底部木葉痕	A･C･D	良	明褐色 7.5YR5/8	2 次 9 集報告済 k-21
2	壺	外面縦･斜位ハケ目後横･斜位ヘラミガキ、内面横･斜位ハケ目後横位ヘラナデ	A･B･C･D	普	明黄褐色 10YR6/6	2 次 9 集報告済 k-22
③	壺	頸部縦位ヘラミガキ、肩部有稜、ハケ刺突羽状文、内面横･斜位ハケ目、外面一部赤色塗彩	A･I	普	橙色 7.5YR6/6	旧 2 号溝出土
④	壺	頸部横位ハケ目後横位ヘラミガキ、肩部有稜、ハケ刺突羽状文、3 個一組(推定･単位不明)の円形浮文貼付け	A･I	良	橙色 7.5YR6/6	旧 2 号溝出土
⑤	壺	LR･RL･LR 羽状縄文、横位沈線区画、横位ヘラミガキ、一部赤色塗彩	A	普	橙色 7.5YR6/6	旧 2 号溝出土
⑥	壺	ハケ刺突羽状文、横位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	旧 2 号溝出土
⑦	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横･斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	褐色 7.5YR4/3	旧 2 号溝出土

第 27 表　第２次調査区出土遺物観察表　　No.①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	頸部 RL･LR･RL 羽状縄文、横位沈線区画、 肩部縦位ハケ目後縦･横位ヘラミガキ	A･D･H	良	明褐色 7.5YR5/8	種子圧痕 GBY19-0031 久ヶ原Ⅰ式壺 ２次ゴ-Q 区一括